

『文化財と技術』

第7号

<特集 ヤマト王権と地域王権／技術の繋がり>

第一部 ヤマト王権と地域王権／技術の繋がり

- | | |
|----------|--------------------------------------|
| 鈴木勉 | 三角縁神獣鏡製作地論と古墳時代研究 |
| 前田亮 | 技術と継承－その繋がり－ |
| 福井卓造・鈴木勉 | ヤマト王権と地域王権の確執
－遅らされた技術移転「冶鉄技術」－ |
| 上村武 | 岡山県猿喰池製鉄遺跡の製鉄炉と技術継承論 |
| 李東冠・武末純一 | 百濟の鉄と製鋼技術に関する試論
－梯形鋸造鉄斧を中心に－ |
| 金跳咏 | 東北アジアにおける鉄器文化の到来と限治供鉄政策 |
| 鈴木勉・金跳咏 | 新山古墳・大成洞古墳群 88号墳出土
金銅製帶金具などの円文たがね |

第二部 古代東アジアの装飾技術

- | | |
|---------|--|
| 沢田むつ代 | 古墳出土の鉄刀と鉄劍の
柄巻きと鞘巻きの種類と仕様の事例 |
| 金宇大 | 新羅における垂飾付耳飾の系統と変遷 |
| 李漢祥 | 皇南大塚北墳嵌玉腕輪の製作工程と製作地 |
| 金跳咏・鈴木勉 | 皇南大塚北墳出土「夫人帶」銘銀製帶金具の線彫り技術について |
| 鈴木勉 | 朝鮮半島三国時代の彫金技術 その 15～19
その 15 国立慶州博物館・菊隱 collection 大刀の双連珠凸魚々子文
－藤ノ木古墳出土鞍金具の出自を求めて－ |
| | その 16 天安龍院里出土龍文環頭大刀の金板压着技法とは |
| | その 17 李漢祥「陝川玉田 M3 号墳龍鳳紋大刀の
環部製作工程」への批判 |
| | その 18 慶尚南道 咸陽郡 白川里 1 号出土大刀のうろこ文の打ち出し |
| | その 19 全北高敞郡雅山面鳳徳里古墳群 1 号墳出土飾履の
製作技術の疑問 |

第三部 復元研究報告

- | | |
|-----|---|
| 鈴木勉 | 群馬県山王金冠塚金銅製冠の復元 4～6
4 新羅の出字形冠 その 2
5 林堂洞 7 A 号墳金銅製冠
6 林堂洞 7 C 号墳金銅製冠 |
|-----|---|

<付録>

- | | |
|-----|--|
| 鈴木勉 | 三角縁神獣鏡の仕上げ加工痕と製作体制
(『河上邦彦古稀記念論集』2015 年より転載) |
|-----|--|

『文化財と技術』第7号 目次

<特集 ヤマト王権と地域王権／技術の繋がり>

第一部 ヤマト王権と地域王権／技術の繋がり

三角縁神獣鏡製作地論と古墳時代研究	鈴木 勉	5
技術と継承 —その繋がり—	前田 亮	10
ヤマト王権と地域王権の確執 —遅らされた技術移転「冶鉄技術」—	福井卓造・鈴木勉	32
岡山県猿喰池製鉄遺跡の製鉄炉と技術継承論	上桜 武	40
百濟の鉄と製鋼技術に関する試論 —梯形鋸造鉄斧を中心に—	李東冠・武末純一	63
東北アジアにおける鉄器文化の到来と限治供鉄政策	金 跳 咏	78
新山古墳・大成洞古墳群 88号墳出土 金銅製帶金具などの円文たがね	鈴木勉・金跳咏	101

第二部 古代東アジアの装飾技術

古墳出土の鉄刀と鉄剣の柄巻きと鞘巻きの種類と仕様の事例	沢田むつ代	111
新羅における垂飾付耳飾の系統と変遷	金 宇 大	143
皇南大塚北墳嵌玉腕輪の製作工程と製作地	李 漢 祥	180
皇南大塚北墳出土「夫人帶」銘銀製帶金具の線彫り技術について	金跳咏・鈴木勉	197
朝鮮半島三国時代の彫金技術 その15～19	鈴木 勉	205
その15 国立慶州博物館・菊隱 collection 大刀の双連珠凸魚々子文 —藤ノ木古墳出土鞍金具の出自を求めて—		
その16 天安龍院里出土龍文環頭大刀の金板圧着技法とは		
その17 李漢祥「陝川玉田M3号墳龍鳳紋大刀の環部製作工程」への批判		
その18 慶尚南道 咸陽郡 白川里1号出土大刀のうろこ文の打ち出し		
その19 全北高敞郡雅山面鳳徳里古墳群1号墳出土飾履の製作技術の疑問		

第三部 復元研究報告

群馬県山王金冠塚金銅製冠の復元 4～6	鈴木 勉	223
4 新羅の出字形冠 その2		
5 林堂洞7A号墳金銅製冠		
6 林堂洞7C号墳金銅製冠		

<付録>

三角縁神獣鏡の仕上げ加工痕と製作体制 (『河上邦彦古稀記念論集』2015年より転載)	鈴木 勉	233
---	------	-----

第二部 古代東アジアの装飾技術

古墳出土の鉄刀と鉄剣の柄巻きと鞘巻きの種類と仕様の事例	沢田むつ代	111
新羅における垂飾付耳飾の系統と変遷	金 宇 大	143
皇南大塚北墳嵌玉腕輪の製作工程と製作地	李 漢 祥	180
皇南大塚北墳出土「夫人帶」銘銀製帶金具の線彫り技術について	金跳咏・鈴木勉	197
朝鮮半島三国時代の彫金技術 その 15 ~ 19	鈴 木 勉	205
その 15 国立慶州博物館・菊隱 collection 大刀の双連珠凸魚々子文 —藤ノ木古墳出土鞍金具の出自を求めて—		205
その 16 天安龍院里出土龍文環頭大刀の金板圧着技法とは		208
その 17 李漢祥「陝川玉田 M3 号墳龍鳳紋大刀の環部製作工程」への批判		210
その 18 慶尚南道 咸陽郡 白川里 1 號出土大刀のうろこ文の打ち出し		214
その 19 全北高敞郡雅山面鳳德里古墳群 1 号墳出土飾履の製作技術の疑問		217

新羅における垂飾付耳飾の系統と変遷

金宇大

I. はじめに

新羅の金工威信財の中でも、垂飾付耳飾は最も通時的・汎地域的に出土する資料であり、他の金工品に比べ、早い時期から研究が蓄積されてきた。しかし、新羅の垂飾付耳飾は、膨大な資料数と多様な形態的特徴のため、その系統的な整理が容易でなく、依然十分な検討がなされたとは言い難い状況にある。

本稿の目的は、新羅圏域で出土する垂飾付耳飾の系譜関係と時間的位置を詳細に整理・把握し、その変遷を検討しつつ画期の評価を新羅の対外関係という側面からおこなうことである。本稿ではまず、垂飾付耳飾に関する既往の研究を整理し、現時点での研究の到達点と残された課題を明確にする。それを踏まえ、新羅の垂飾付耳飾を部品ごとにわけて検討し、耳飾を構成する属性として分類する。このうち、意匠的特徴や製作技術面の差異が最も顕著に反映される中間飾を基準に耳飾の「系統」を設定し、系統ごとに配列する。さらに、系統を横断する諸属性の共有関係と一括出土資料を参照しつつ、系統間の時期的な併行関係を探り、変遷分期を設定して暦年代を付与する。最後に、新羅の耳飾製作体制の変化を誘発させた要因について、新羅の対外関係という側面を中心に考察を試みる。

II. 研究史の検討

これまでの垂飾付耳飾研究は、大きく二つの部類にわけることができる。一つは、耳飾自体の型式分類に基づく編年・系譜の研究であり、もう一つは金工技術面からの分析による製作技術の復元研究である。本稿の目的は耳飾の系統把握を土台とした型式分類による編年の再構築であるため、ここでは前者の研究状況について整理・検討し、研究の課題を明らかにしたい。

垂飾付耳飾の研究は、高橋健二や喜田貞吉による概略的な研究（高橋 1919、喜田 1920）をその嚆矢とし、濱田耕作・梅原末治により本格的な集成と分類が初めて試みられた（濱田・梅原 1922）。その後、藤田亮策は、実見調査にもとづき個別資料を詳細に観察報告した上で、分類をおこなった。藤田は、耳に接する環の型式によって細環式・太環式・多枝式または連枝式の3種に大別し、さらに垂下飾の形状から円球形・杏葉形・山梶子形などに細別した（藤田 1931）。現在においても新羅の耳飾研究における分類の基礎となっている太環・細環の区分を最初に提唱した点は特筆される。藤田の研究は、分類の枠組みや製作技法への着眼など、その後の耳飾研究の方向性の基礎を固めた点で、学史的な意義が極めて大きい。

戦後、新羅の垂飾付耳飾研究はしばらく停滞するが、1970年代から80年代にかけて、新羅古墳の編年研究が盛んになったことで、相対編年確立のための検討材料として脚光を浴びはじめる。この時期の研究は、藤田亮策による太環・細環の分類の枠を継承し、これに中間飾や垂下飾の形態を加味して、細分型式を設定することに重点が置かれた（尹世英 1974・1984、李仁淑 1977、崔秉鉉 1981・1992）。中でも崔秉鉉は、主環の形状から太環耳飾と細環耳飾に大別した後、耳飾各部の中間飾、連結金具、尾飾（＝垂下飾）をそれぞれ分類した上で、各構成部品の型式学的な先後関係を検討し、積石木槧墳の編年と比較しつつこれらを編年した。このような耳飾を部品に分解し

主 環			連 結 金 具					
	太環	細環		系状	板状α 1類	板状α 2類	板状β 1類	板状β 2類
中 間 飾								
	立方体形	円筒形 a1 類	円筒形 a2 類	円筒形 a3 類	円筒形 b1 類	円筒形 b2 類	円筒形 c1 類	円筒形 c2 類
垂 下 飾								
	竹葉形 A 類	竹葉形 B 類	錘形 A1 類	錘形 A2 類	錘形 A3 類	錘形 B1 類	錘形 B2 類	ペン先形 十字形

図2 垂飾付耳飾の部分別分類模式図

1) 主環

太環と細環の区別を、本稿では以下のように定義する。

太環 複数の金板の部材を組み合わせてつくった、中空で断面蒲鉾形の環⁽²⁾。

細環 金製や金銅製、銅地金張の棒材、あるいは筒状に卷いた金板を環状に曲げてつくった、断面円形の環⁽³⁾。

2) 中間飾

最も複雑な構造をもち、意匠的特徴の差異が明確にあらわれるのが中間飾である。以下のように、7種に大別する。

空球形 半球状の金属板を組み合わせて球体をつくり、下部に半球体を接合したもの。

華籠形 小環を連接して球体と半球体をつくり、球体下部に半球体を接合したもの。小環連接球体とも呼ばれる。構造的特徴により次の4種類に区分する。

a : 球体部の小環が、上半球と下半球とで互い違いに接するもの。球体間飾を設けず、球体部の直下に半球部がつく。球体部の中心をめぐる刻目帯は、小環の連接により球体を完成させたのちに上から巻き付ける。

b : 球体部の小環が上半球と下半球とで対称に接し、球体間飾に小環を一つ挟んだもの。

c : b類の球体間飾の小環を2個ないし3個に増やしたり、短い円筒状の部材を挟んだりして長さを増したもの。

d : 球体間飾の小環の数を四つ以上に増やしたり、金線をコイル状に巻いた部品を挟み込んだりすることで、球体間飾が筒状をなすように長くなったもの。球体間飾に斜格子状の刻みを施した筒状の部品を被せるものもd類に含める。

このほかに、下半球をともなわず球体部のみで構成されるものも存在する。しかし、新羅圈では出土例が非常に少なく⁽⁴⁾、むしろ高句麗圈に類例が多いため、こうした構造をもつ耳飾は高句麗系と指摘されている（李漢祥 2004）。したがって本稿では型式として細別しない。

立方体形 小環を連接して立方体状につくったもの。立方体の上下に小環を重ねて、上下にやや長くしたものが多い⁽⁵⁾。

円筒形 円筒状を呈するもの。半球状の金板を主体とする上下の部品と、これに挟まれる胴部となる。胴部の構造から、大きく以下の3種に区分する。

a : 小環を円筒状に連接して胴部をつくり、刻目帯を巡らせた半球状の部品で上下から挟み込んだもの。

b : 金属板を筒状に曲げて胴部をつくり、刻目帯を巡らせた半球状の部品で上下から挟み込んだもの。

c : 琥珀玉や木などの非金属製部材で胴部をつくり、刻目帯を巡らせた半球状の部品で上下から挟み込んだもの。

円筒形a類は、小環の段数や刻目帯の形状から、さらに3種に細分する。

a 1 : 小環の段数が1段のもの。

a 2 : 小環の段数が2段以上のもの⁽⁶⁾。

a 3 : 小環の段数が2段で、半球状部品に巡らせた刻目帯の中間に明瞭な稜があり、算盤玉状のシルエットを呈するもの。

円筒形a類の上下の半球状部品には細粒装飾を施したものが多く、金粒を四方に四つだけつけたものや、帯状に一周させるもの、帯状の金板を円形に曲げて溶着させたものなど、細部の装飾は多様である。円筒形a類では、これらの細かな意匠が資料ごとに異なるため、極めて複雑な様相を呈する。

円筒形b類は、胴部の長短により2種に細分する。

b 1 : 胴部の長さが、上下の半球部を合わせた長さよりも明らかに短いもの。

b 2 : 胴部の長さが、上下の半球部を合わせた長さと同程度かそれよりも長いもの。

円筒形c類は、胴部の部材が遺存する例がほとんどないため、胴部の形状や素材による細分は不可能であるが、半球状部品に付加する装飾に明瞭な傾向が認められる⁽⁷⁾。そこで、半球状部品の形状をもとに2種に細分する。

c 1 : 円形に加工した帶状の金板を三つ、あるいは四つ溶着させた半球状部品に刻目帯を付し、胴部を上下から挟んだもの。

c 2 : 華籠形中間飾のような、小環を連接させてつくった半球体に刻目帯を付し、胴部を上下から挟んだもの。

花瓣形 琥珀玉や木などの有機物製装飾を4弁の花瓣状装飾をもつ部品で上下から挟み込んだもの。構造により2種に細分する。

a : 半球状部品の端部から花瓣が伸びたもの。側面形状が「U」字状を呈する。

b : 十字形に切り出した金板の足を上部に曲げて花瓣部をつくったもの。基部から直接花瓣が伸びるため、側面形状が「コ」字状を呈する。

橿球形 橿球形の空球に、帯状の金板を曲げてつくった断面菱形の棘状装飾を付したもの。大部分が中間飾の上下両端に連結部が付随し、中間飾自体が連結金具の役割を果たす点が大きな特徴である。

3) 垂下飾

中間飾の下部に垂下される部品で、中間飾に比べ構造は単純であるが、様々な意匠が存在する。形状から 6 種に大別する。

心葉形 横方向に広がった水滴のような形状を呈するもの。縦横の幅の比率は、ほぼ同程度かやや横幅のほうが長いものが大半であるが、まれに横幅に対して縦幅が長いものもある。後述する竹葉形垂下飾と峻別するため、便宜的に縦幅が横幅の 1.4 倍未満という基準を設けておく。形態的特徴から 3 種に区分できる。

A : 通常の水滴状を呈するもので、垂下飾平面の中心軸上に装飾をほどこさないもの。

B : 垂下飾平面の中心軸上に縦方向の装飾要素を附加したもの。

C : 連結金具の通し孔の上部に抉りをもつもの。

心葉形 B 類は、装飾方法により 5 種に細分できる⁽⁸⁾。

B 1 : 裏側から打出加工を施して、中心軸上に縦線状の隆起部を設けたもの。

B 2 : 両面の中心軸上に断面半円形の突帶を付したもの。

B 3 : 両面の中心軸上に断面半円形で刻目を施した突帶を付したもの。

B 4 : 両面の中心軸上に断面半円形で刻目を施した突帶を付し、周縁部に刻目帯を巡らせたもの。

B 5 : B 4 類にさらに装飾を加え、周縁部の刻目帯を二重にしたり細粒装飾を施したりして、より華美に仕上げたもの。

円形 平面形が円形を呈するもの。切り出した 1 枚の金板でつくられており、周縁部に刻目帯を巡らせたものや、曲面加工を施したもの、連結部に抉りをもつものは確認できない。

竹葉形 心葉形を縦に引き伸ばしたような、細長い形状を呈するもの。前述したとおり、心葉形との峻別基準は「縦幅が横幅の 1.4 倍を超えるもの」とする。形態上の特徴から、次の 2 種に区分できる。

A : 通常の心葉形の先端部を縦に伸ばしたもの。

B : 連結金具の通し孔の上部に抉りをもつもの。

錘形 2 枚の金板を合わせてつくった中空の錘状突起を垂下飾とするもの。錘状突起の先端は、一度窄んでからやや膨らんだ蕾状を呈する。中間飾との連結形態から、次の 2 種に区分できる。

A : 連結金具を用いず、錘状突起が中間飾と一体となったもの。

B : 錘形垂下飾が中間飾と別づくりで、連結金具によって垂下されるもの。

錘形 A 類は、連結金具を用いて垂下飾を連結しないという点⁽⁹⁾において、他の垂下飾と一線を画する。セットとなる中間飾も、構造上、特異な形状を呈する。錘状突起の形状により、以下のように細分する。

A 1 : 锤状突起が小型で、中間飾と同程度かそれ以下の大きさのもの。

A 2 : 中間飾より明確に長い錘状突起をもつもののうち、耳環部と中間飾を、中間飾と一体となつたリングで連結したものです。

A 3 : 中間飾より明確に長い錘状突起をもつもののうち、耳環部と中間飾を「Ω」字状に曲げた金板で連結したものです。

錘形B類は、錘形A類の錘状突起を独立した垂下飾としたものであるが、細部の装飾は錘形A類との間に大きな差がある。側面には先端のくびれ部手前まで刻目帯が巡り、連結金具の通し孔の上部には抉りが認められる。側面の刻目帯の端部の形状により次の2種に細分する。

B 1 : 刻目帯の端部をそのまま終わらせたもの。

B 2 : 刻目帯の端部が外側に巻きあがっているもの。

ペン先形 竹葉形の先端部手前にくびれを設け、先端がペン先のような形状になったもの。

十字形 ペン先形の金板2枚を縦方向に直交させた、断面十字形を呈するもの。

4) 連結金具⁽¹⁰⁾

主環と中間飾および垂下飾を連結する部品である。大部分は他の部位に隠れて見えないため、中間飾のような意匠上のバリエーションはほとんどなく、機能的性格が強い。形状から2種に大別する。

糸状 針金状の細い金糸を連結金具として用いたもの。

板状 幅のある細長い金板を連結金具に用いたもの。

板状金具は、金板の幅によって次のように区分する。

α : 金板の幅が均一なもの。

β : 金板の幅が不均一で、垂下飾との連結部がやや幅広になっているもの。

また、これらは耳環部との連結方式により細分できる。

α 1 : α 類金具をそのまま使用して連結するもの。

α 2 : α 類金具の端部に幅広の金板でつくったリングを鑑付けして耳環部との連結に用いたもの。

β 1 : β 類金具をそのまま使用して連結するもの。

β 2 : β 類金具の端部に幅広の金板でつくったリングを鑑付けして耳環部との連結に用いたもの。

2. 部品別類型の時間的先後関係

前章では、耳飾を構成する各部品をそれぞれ検討し、分類した。次に、部品別類型の時間的先後関係について、型式学的観点から想定しておく。

1) 中間飾

華籠形中間飾は、球体間飾が次第に長くなるか、もしくは短くなる方向での変化が推測される。既往の研究においても、球体冠飾が長くなる方向での変化が指摘されており（三木1996、李漢祥1998・2004）、この想定が正しいとすれば、華籠形a→b→c→dの順番での変化を想定しうる。

空球形と華籠形は、球体部の下に半球体部を接合するという構成において共通性を認めうる。これらの製作にはそれぞれ異なる技術と工程を必要とするため、連続的変化の先後関係にはないと考えられるが、意匠的な影響を認められることから、どちらかがもう一方より派生したものである可能性が示唆される。

円筒形中間飾は、円筒形a類とb類、c類のいずれも、半球状部品で胴部を上下から挟み込むという構造において共通するが、胴部の製作工程はそれぞれ異なることが想定されるため、一系的な先後関係をなすものとは考え難い。一方で、円筒形a類とb類には、設定した細別型式間に胴部の長短という差異があり、華籠形中間飾で想定した変化の性質から考えると、時期的な様相を反映し

た差異である可能性が高い。すなわち、a 1→a 2、b 1→b 2ないしその逆の変化が想定される。円筒形c 1類とc 2類については、胴部の材質において共通するものの、部品の製作方法が異なるため、連続的な変化とみなすのは不可能である。一方が他方より派生したととらえるべきであろう。上下の半球状部品の形状は、c 1類がa 1やb 1と共に共通することから、c 2類がc 1類から派生したものとみなしておく。

花瓣形中間飾は、中間飾の胴部に有機物製の素材や玉を用い、それを上下から挟むという点で、円筒形c 類中間飾と共に共通する。ここで、円筒形c 類から花瓣形中間飾が派生したと仮定すると、型式学的には円筒形c 類→花瓣形a 類→花瓣形b 類の順に変化したと想定される。すなわち、円筒形c 類において必要であった非金属製の胴部を固定するための半球状部品に、花瓣状の足がついたことで、上下の部品が半球状である必要性が構造上なくなったため、単純に金板を切り出してつくるという製作工程の省略がなされた、という解釈である。しかし、出土地が明らかな花瓣形a 類中間飾をともなう資料は、まだ新羅圏では発見されていない。その系譜については、他地域との関係を検討し、後述する。

2) 垂下飾

心葉形垂下飾については、李漢祥による変遷推定（李漢祥 1998・2004）が参考となる。すなわち、中軸線上への装飾の付与から次第に加飾化が進むというもので、本稿の分類ではA→B 1→B 2→B 3→B 4→B 5となる⁽¹¹⁾。これは、打出技法による隆起線の表現から、突帶の付与、その突帶への刻目の付与、刻目帯の追加という一連の流れとして理解することができ、一系的に順次変化していく属性である可能性が高い。ただし、李漢祥による上の変化についての指摘は、太環耳飾の場合に限って言及されたものであるが、耳飾全体ではA類は消滅せず、細環耳飾で採用され続ける。つまり、A類からB 1類が派生し、B 1類以降が連続的に変化していったものと考えられる。一方、連結金具の通し孔の上部に抉りをもつC類は、B 1類派生後のA類が変化、あるいはA類から派生して生じたものと推測される。これは後述する連結金具の変化と連動しているとみられる。

同様に、竹葉形垂下飾のA類とB類も、心葉形A類とC類に該当する形状の変化ととらえることができる。したがって、時間的にはA→Bの関係が想定できる。ただし、竹葉形B類は、周縁部に刻目帯を付したり、曲面加工を施したりしたものが大半で、竹葉形A類と意匠的差異が大きいため、必ずしも一系的な関係とは断定できない。

錘形垂下飾A類については、一体となった中間飾部に対し、垂下飾が短いものから長いものへと変化することが指摘されている（三木 1996）。A 1類からA 2類およびA 3類への変化が想定されるが、A 1類がいずれも中間飾と一体をなすリングで耳環部と連結されていることを勘案すると、A 1→A 2→A 3の関係が予想される。鐘形垂下飾B類は、中間飾と垂下飾を別途につくって連結金具でつなぐという新羅の垂飾付耳飾の基本的構成に合わせ、A類から派生したものと考える。さらに、側面の刻目帯にさらなる装飾要素を付加するために端部を巻き上げたとするならば、B 1→B 2という関係となろう。なお、B類はいずれも連結金具の通し孔上部が抉りをもつ形状となっており、心葉形A→Cと竹葉形A→Bが耳飾の全体的な変化の画期に連動したものであるとすれば、錘形B類は比較的遅い時期に出現したと予想できる。

竹葉形やペン先形、十字形は細長い平面形状において類似性をもつが、これらは早い段階から冠飾で採用されてきた意匠であり、これが垂飾付耳飾に転用されたと考えられる。このうち、竹葉形については、数量的にみて、耳飾の意匠としても定着したものとみられる。

3) 連結金具

これまで、先学らにより糸状→板状の変化が指摘されている（伊藤 1972 など）。しかし、両者は構造的に大きく異なるため、型式学的な先後関係にあるものとはみなし難い。耐久性の向上という機能面の改善を目的に、新たに板状連結金具が創出されたと考える。したがって、糸状から板状への変遷は漸次的に移行していった可能性が高い。このような耐久性向上の流れを前提とするならば、板状 α 1→板状 β 1 の変化が考えられる。ただし、別づくりのリングに鑑付けするタイプが板状 α と β の両方に存在することから、板状 α 1類から板状 β 1類が派生したのも、 α 1類は残ったと考えられる。 α 1から α 2が、 β 1から β 2が現れたと想定しておく。

IV. 耳飾の系統と配列

1. 中間飾からみた耳飾の系統区分

ここまで、部品別類型の型式学的な先後関係について想定した。しかし、これはまだ仮定に過ぎず、現時点では実際にそのような変化をたどったことが証明されたわけではない。そこで本章では、先に想定した各属性の型式学的变化が運動するのかを確認しつつ、属性の集合体たる垂飾付耳飾の時間的配列をおこない、想定した部品別の変化が時間的要因による変化であることを検証する。

以下の分析では、中間飾の大別分類を重視し、同じ型式の中間飾を共有する資料群を一つの「系統」として設定する。中間飾の意匠は、外見上の差異を最も顕著にあらわすだけでなく、製作工程や用いられる製作技法そのものの差異を反映している。設計の最も初期の段階で決定される部位であり、属性の集合体としての耳飾全体を決定する要素と考えられる。

新羅の垂飾付耳飾は、採用される中間飾の類型により、大きく六つの系統にわけられる。華籠形系統、円筒形系統、空球形系統、花瓣形系統、橢球形系統、立方体形系統である。耳飾の時間的配列は、これらの系統ごとに試みることとする。

資料の配列に際し、最も優先すべき属性は、垂下飾であると考える。垂下飾は、構造こそ比較的単純ではあるが、設定した細分型式間の型式学的な近似性が高く、より連続的で順次的な変化が期待される。連結金具は、機能的な性格を強くもち、型式差が時期差を反映する可能性は高いが、上述したように順次的な変化ではないと考えられ、またさほど敏感に変化を繰り返しているわけではないため、優先順位は垂下飾の次とする。系統差の根拠とした中間飾は、細分型式内での形態的近似性こそ高いが、意匠上のバリエーションが豊富で、型式設定の際に捨象した装飾要素が多く、例外的な資料が少なくない。また、大別型式内で细分できなかった中間飾もあるため、配列における属性としては第3位とする。

以下、垂下飾→連結金具→中間飾の順で、配列を試みる。なお、系統差を明確にするため、細粒装飾や垂下飾の副飾の有無といったその他の属性も参照する。

2. 各系統の配列

1) 華籠形系統（表1、図3-3～16）

まずは、最も資料数が多く、かつ耳飾の出現から終焉まで通時的に存在する華籠形中間飾をもつ耳飾群から検討する。

華籠形系統の配列を示したのが表1である。基本的に、心葉形垂下飾を採用したものを対象に配列し、それ以外の垂下飾をもつものを下に示した。

華籠形中間飾をもつ耳飾には、板状 β 類金具が用いられない。垂下飾の9割が心葉形で、かつ心

表 1 華籠形系系統の配列

製作段階	出土地	垂下飾	連鉢金具	中間飾			主環	垂下飾幅	共伴遺物			図出典	備考	
				心葉A	心葉B	心葉C			馬具	土器	工具			
1	慶州 仁王洞14号1樽	○	○	○	○	○	○	1.2	1.4			慶州III前	新羅II A古	3.3 1
	慶州 仁王洞14号2樽	○	○	○	○	○	○	0.9	1.2			慶州III後	新羅II A中	3.4 2
	慶州 皇南大塚南墳A	○	○	○	○	○	○	1.3	1.3			慶州III後	新羅II A中	3 3
	慶州 皇南大塚南墳B	○	○	○	○	○	○	1.5	1.5			慶州III後	新羅II A中	4
	慶州 皇南大塚南墳C	○	○	○	○	○	○	1.2	1.2			慶州III後	新羅II A中	5
	慶州 仁王洞19号C樽	○	○	○	○	○	○	1.1	1.2	上				3.5 6
	安東 太華洞9号	○	○	○	○	○	○	1.3	1.1					3.6 7
	慶州 皇南洞出土	○	○	○	○	○	○							8
	慶州 仁王洞19号F樽	○	○	○	○	○	○	1.8	1.9			慶州IV		9
	蔚山 早日里42-2号石樽	○	○	○	○	○	○	2.1	1.7					10
2	慶州 皇南大塚南墳D	○	○	○	○	○	○	1.2	1.2			慶州III後	新羅II A中	11
	慶州 皇南大塚北墳A	○	○	○	○	○	○	2.0	1.8	上		慶州III後		12
	慶州 仁王洞16号6樽A	○	○	○	○	○	○	1.9	1.8					13 皇吾洞16号6樽Bと主環を共有。
	金海 伽耶の森1号石樽	○	○	○	○	○	○	1.9	2.3					14
	慶州 仁王洞A-2号	○	○	○	○	○	○	1.4	1.4	上下		慶州III後	新羅II A中	15
	慶州 仁王洞A-2号	○	○	○	○	○	○	1.5	1.6	上		慶州III後	新羅II A中	16
	慶州 仁王洞19号E樽	○	○	○	○	○	○	2.2	2.1	上下				17
	慶州 仁王洞19号F樽	○	○	○	○	○	○	2.2	2.1	上下				18
	慶州 皇南洞破壊古墳2樽	○	○	○	○	○	○	1.9	1.8	上		慶州III後		19
	大邱 内盾洞51号2樽	○	○	○	○	○	○	1.7	1.5	上				20
3	不明 出土地不明A	○	○	○	○	○	○	?	?	上				21
	慶州 強鳳冢A	○	○	○	○	○	○	○	1.6	1.5				22
	慶州 仁王洞北墳B	○	○	○	○	○	○	2.0	1.8			慶州III後		23
	慶州 仁王洞北墳C	○	○	○	○	○	○	2.0	1.9	上		慶州III後		24
	不明 出土地不明B	○	○	○	○	○	○							25
	不明 出土地不明C	○	○	○	○	○	○							26
	慶州 仁王洞北墳D	○	○	○	○	○	○	1.9	1.8	上下		慶州III後		27
	慶州 仁王洞北墳E	○	○	○	○	○	○	2.0	1.8	上下		慶州III後		28 垂飾と主環を共有。
	慶州 仁王洞北墳F	○	○	○	○	○	○	2.1	1.8	上下		慶州III後		29 皇南大塚北墳Lと主環を共有。
	慶州 仁王洞16号6樽B	○	○	○	○	○	○					慶州IV	新羅II B	13 皇吾洞16号6樽Aと主環を共有。
4	慶州 金冠冢A	○	○	○	○	○	○					慶州IV	新羅II C	30 金冠冢Cと主環を共有。
	慶州 仁王洞出土A	○	○	○	○	○	○							31
	不明 出土地不明D	○	○	○	○	○	○							32
	慶州 皇南大塚北墳G	○	○	○	○	○	○	2.0	1.9	上		慶州III後		33
	慶州 仁王洞北墳H	○	○	○	○	○	○	2.5	2.2	上下		慶州III後		34 一つの主環に二つの垂飾(本稿での型式)は同じ)。
	慶州 仁王洞北墳I	○	○	○	○	○	○	2.5	2.3	上下		慶州III後		35
	慶州 金冠冢J	○	○	○	○	○	○	2.1	2.0	上下		慶州III後		36
	慶州 月城路力27号	○	○	○	○	○	○	?	?	上下		慶州IV	新羅II B	37
	慶州 脳鳳冢B	○	○	○	○	○	○	2.0	1.8	上				38
	慶州 仁王洞北墳K	○	○	○	○	○	○	2.2	1.9	上下				39 主環に棒子状の透かし。
5	慶州 仁王洞北墳L	○	○	○	○	○	○	2.1	1.8	上下				40 皇南大塚北墳Fと主環を共有。



図3 新羅の垂飾付耳飾の例 (1)

1. 皇南大塚南墳、2. チョクセム地区 C1号木櫛、3. 皇吾洞 14号1櫛、4. 皇吾洞 14号2櫛、5. 仁旺洞 19号C櫛、
6. 太華洞 9号、7. 内唐洞 51号II櫛、8. 皇南洞破壊古墳2櫛、9. 皇南大塚南墳、10. 皇南大塚北墳、11. 内唐洞 55号、
12. 味鄒王陵5地区2号、13. 皇吾洞 100番地6号、14. 邑内里5号、15. 桂城A地区1号、16. 金鳥塚、
17. 仁旺洞 19号C櫛、18. 林堂7C号、19. 星山洞 58号、20. 皇吾洞 1号、21. 味鄒王陵7地区7号、22. 大里里3号

葉形C類は採用されない。また、副飾や曲面加工をともなう垂下飾は認められない。糸状金具は、慶州瑞鳳塚Dのように、出土地が明らかな資料においても新しい要素と組み合う例があり、板状金具への移行はやはり漸次的になされたようである。

表1をみると、先に想定した垂下飾と連結金具の変遷の想定は、ひとまず互いに矛盾せず整合的である⁽¹²⁾。表1の配列結果から、華籠形系統の製作段階を以下のように五つにわける。

第1段階は、板状連結金具が出現する以前の段階である。第3段階以降の指標がいずれも心葉形垂下飾の型式変遷に基づいているのに対し、第1段階と第2段階の指標が連結金具に依拠している理由は、上述したように、A類とB1類の共存期間にある程度の幅が考慮されるからである。この段階の垂下飾はA類に限られる。主環には太環と細環が混在している。

第2段階は、板状 α 1類金具の導入を指標とする。垂下飾に心葉形B類が出現し、中間飾もb類が主流をなすようになる。例外的に、華籠形c類中間飾をもつ金海伽耶の森造成敷地内遺跡1号石槨墓例は、球体間飾に縦方向の線を刻んだ一枚の金板でつくった円筒形部品を用いたもので、定義上はc類となるものの、皇南大塚北墳で確認される筒状の部品を用いたものとはやや様相を異にする資料である。同例は第2段階に属すが、華籠形c類中間飾の本格的な出現は、第3段階からと考えられる。

第3段階になると、心葉形B1類が消滅し、心葉形B2類が出現する。この段階には糸状金具はほぼ用いられなくなり、中間飾もb類からc類へと変化する。後半には垂下飾は心葉形B2類からB3類へと変化し、中間飾にもd類が出現するなど、連続的な変化が進む。また、この段階以降、主環に細環を用いるものがみられなくなり、すべて太環耳飾となる。

第4段階は、心葉形B4類の出現を指標とする。連結金具は、例外は存在するものの、ほぼすべて板状 α 1類が採用される。華籠形中間飾は、c類からd類への移行が進むが、この変遷の過程で、球体間飾に斜格子状刻目文を施した筒状の金板を用いる例外的な資料が混ざる。この段階以降の資料には、例外なく中間飾の上方球体部と下方半球部の両方に歩搖が付されるようになる。

第5段階は、心葉形B5類の出現を指標とする。最も加飾化が進んだ段階といえる。連結金具には板状 α 2類が出現するが、資料数は少ないものの慶州普門洞合葬墳横穴式石室例のような耳環部との連結部が幅広になったものも認められ、過渡的な型式として評価できる。中間飾はいずれもd類に変化している。この時期には、小さな金粒を溶着させて装飾する細粒装飾技法を用いた意匠が認められるようになる。

以上の変遷を、共伴遺物の変遷観と対照させることで検証を試みたい。同一基準による広域編年が試みられている遺物は限られるが、ここでは、慶州のほか慶山、金海など広域の編年をおこなっている諫早直人による馬具研究（諫早2012）と、これとの並行関係を想定しつつ昌寧の馬具を編年した李炫姪の研究（李炫姪2014）を参照する。合わせて、麻立干期以降の新羅土器の変遷について比較的詳細に扱い、また王陵級墳墓の評価を積極的におこなっている白井克也の新羅土器編年（白井2003）も参考にする。共伴遺物からの時期的な評価ができない例が多いため、十分な検証とはいえないものの、表1の配列は、馬具や土器の変遷とも大きく齟齬をきたさない。ただ、梁山夫婦塚と金鳥塚の耳飾の評価が、土器による年代観よりかなり新しく位置づけられる結果となっている。しかし、同じ新羅II C期古段階の土器を有する金鈴塚の資料などと比べると、垂下飾の型式や細粒装飾の有無など、夫婦塚・金鳥塚の資料は明確に新しい要素を含み、製作順序の配列を古く見直すことは難しい。

ここで、心葉形ではない垂下飾をもつ資料について触れておこう。華籠形中間飾と組み合う心葉形以外の垂下飾としては、円形、十字形、錐形B2類があり、例外的に金帽付勾玉をもつものがある。



図4 新羅の垂飾付耳飾の例 (2)

- 1. 出土地不明、2. 仁旺洞 19号 K櫛、3. 味鄒王陵地区、4. 皇吾洞 34号 2櫛、5. 飾履塚、
6. 飛山洞 37号 II櫛、7. 桂城 III地区 1号、8. 天馬塚、9. デービッド塚、10. 味鄒王陵 7地区 5号、
11. 皇南大塚北墳、12. 皇南洞破壊古墳 2櫛、13. 出土地不明、14. 飛山洞 65号、15. 林堂 6A号
16. 瑞鳳塚、17. チョクセム C8号石櫛、18. 新興里 28号、19. 皇吾洞 4号、20. 路西里 138号

表3 円筒形b類系統の配列

製作段階	出土地	垂下飾		連結金具		中間飾		主環		垂下飾幅		副飾		細粒装飾		共伴馬具		出図典	備考
		心葉A	心葉C	板状α	板状β	円筒b	円筒b	細環	太環	横	縦	曲面加工	曲面加工	細粒装飾	共伴馬具				
	慶州 皇南大塚北墳	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	慶州III後	4-11	130	
	慶州 皇南洞82号東塚	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	慶州IV	131		
	慶州 皇吾洞16号2桿	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	慶州V	132	立方体形系統と主環を共有。	
1	慶州 滋里出土	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		133		
	蔚山下三亭1号積石木椁	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		134		
	大邱 飛山洞65号	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		4-14	135	
2	大邱 佳山洞出土	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		136		
	不明 出土地不明A	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		137		
3	不明 出土地不明B	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		4-15	138	
	慶山 林堂6A号	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		4-13	139	
	慶州 皇南洞破壊古墳2桿	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		4-12	140	
1	不明 出土地不明C	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		141		
	慶州 出土	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		142		

表4 円筒形c類系統の配列

製作段階	出土地	垂下飾		連結金具		中間飾		主環		垂下飾幅		副飾		細粒装飾		共伴馬具		出図典	備考
		心葉A	心葉C	板状α	板状β	円筒c	円筒c	細環	太環	横	縦	曲面加工	曲面加工	細粒装飾	共伴馬具				
1	不明 出土地不明A	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	慶州V	143	新羅II B 華麗形系統の金輪塚Cと主環を共有。	
	慶州 金輪塚	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	慶州VI	87		
	慶州 味鄒王陵地区9-A号・3桿	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	慶州VI	144		
2	慶州 瑞鳳塚	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		4-16	145	
	慶州 チョクセム地区C8号石椁	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		4-17	146	
	慶山 林堂2号北副椁	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		147		
	慶州 龍山洞出土	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		148		
	大邱 達城郡玄風面出土	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		149		
3	不明 出土地不明B	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		150		
	尚州 新興里28号	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		4-18	151	
	梁山 夫婦塚	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		152		
	不明 出土地不明C	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		153		
	慶州 路西里138号	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		4-20	154	
1	慶州 皇南大塚北墳	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	慶州V	155	冠飾の一部。	
3	慶州 味鄒王陵前地域C-11号	ペシ先?	ペシ先?	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	慶州V	4-19	156	
	慶州 皇五洞4号	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		157	垂下飾の先端部が円錐形。	

第2段階は、板状 β 1類金具の出現を指標とする。この時期に垂下飾も心葉形A類からC類へと変化するが、この変化と板状 α 1類から β 1類への変化は、ほぼ同じ時期になされたとみられ、心葉形C類と板状 α 1類金具を採用したものも一定数認められる。心葉形C類と板状 α 1類金具をもつ資料もこの段階に含める。第2段階はこうした変化の過渡期として位置付けられる。円筒形a類系統では、依然a2類中間飾が主流である。円筒形c類系統の中間飾はまだc1類に限られる。

第3段階は、心葉形C類垂下飾と板状 β 類金具を用いる段階である。円筒形a類系統では、中間飾はa3類が主流となり、b類系統でも、完全にb2類へと変化する。c類系統ではc2類が出現する。後半には板状 β 2類金具が現れ、いずれも最新型式の中間飾とセットとなる。

円筒形系統にも、出土地不明の資料が多数含まれており、共伴遺物からの編年の検証が難しい。馬具や土器から年代的位置づけが可能な資料については、大きく齟齬をきたしてはいない。第2段階に属する昌寧桂城III地区1号墳出土の円筒形a類系統耳飾のみ、馬具などの年代と比べて時期がやや遡るが、保有期間を長めに見積もれば一個人の活動時間幅を超える差ではない。

心葉形以外の垂下飾には、竹葉形A類とペン先形がある。竹葉形A類をもつ資料は6点あるが、これらにはすべて板状 α 1類金具が用いられており、中間飾も古相のものに限られる。円筒形系統では確認されていないが、竹葉形B類は、連結金具通し孔上部に抉り部をもち、心葉形C類と同様の性格をもつものとみなすことができる。竹葉形B類が心葉形C類と同じ製作背景で出現したのであれば、竹葉形B類は、心葉形C類の出現を前後する時期に現れた可能性が高く、翻って竹葉形A類は、心葉形C類出現以前、すなわち第1段階に属するものである可能性が高いといえよう。円形垂下飾を採用した皇南洞破壊古墳2槨出土例は、板状 α 1類・円筒形b1類中間飾とセットとなっており、第1段階に属するとみていいだろう⁽¹³⁾。一方、ペン先形を採用した資料は、連結金具が板状 β 1類ないし β 2類、中間飾もすべて最新型式が採用されており、第3段階のものと評価できる。

3) 空球形系統（表5・図3-1～2）

以下、資料数の少ない系統について検討していく。その際、華籠形系統ないし円筒形系統で時期的な指標とした特徴を共有する場合、これを参考とする。

空球形系統の資料は、全部で6例が確認されており、うち1例は中間飾のみの出土である。資料数が少ないため、総合的な評価が難しい。主環の型式は、大部分が細環であるが、太環を採用したものもある。先に空球形中間飾と華籠形中間飾との形態的類似に触れたが、空球形系統で採用される連結金具や垂下飾は、いずれも華籠形系統の古相にみられる特徴を有している。また、慶州チョクセムC1号木槨墓例を除き、すべて糸状連結金具が用いられ、いずれも法量の比較的小さな心葉形A類ないし円形垂下飾を採用している。華籠形系統の製作段階に照らすのであれば、これらはほぼ華籠形系統の第1段階に収まり、チョクセムC1号墓例のみ第2段階の早い段階に位置づけることができよう。

4) 花瓣形系統（表6・図5-1～5）

これまでに11例を確認しているが、半数以上が出土地の不明確な資料であり、前述したように、花瓣形a類をもつ資料はすべて出土地不明である。報告書が刊行されている資料は2例に過ぎず、共伴遺物から時期的な位置づけを確認することは難しい。

主環の型式がわかるものは、すべて細環である。花瓣形a類、b類含め、垂下飾は心葉形C類か竹葉形B類と組み合わさり、唯一ペン先形の垂下飾をもつ湖林美術館所蔵資料も、垂下飾の連結金

表5 空球形系統の配列

製作段階	出土地	垂下飾	連結金具		中間飾	主環		垂下飾幅	歩摇	副飾	曲面粒加工	共伴遺物		図	出典	備考
			糸状	板状 α_1		細環	太環					馬具	土器			
1	慶州 皇南大塚南墳	心葉 A	○		空球	○	1.5	1.5				慶州III後	新羅II A 中	3-1	158	
	不明 出土地不明	心葉 A	○			○									159	冠飾の一部。
	慶州 皇南洞 110号	円	○			○	1.0	1.0				慶州III前	新羅II A 古		160	
	慶山 造永洞 E II -1号	円	○			○									161	立方体形系統と主環を共有。
2	慶州 チョクセム地区 C1号木榔	心葉 A		○	空球	○	1.1							3-2	162	立方体形系統とセットをなす。
	大邱 不老洞 91号3榔	不明	?	?	空球	?	?								163	中間飾のみ出土。



図5 新羅の垂飾付耳飾の例 (3)

1. 出土地不明、2. 皇吾洞 34号3榔、3. 城山古墳、4. 安康邑青令里山77番地、5. 皇南洞 106-3番地、
6. 天馬塚、7. 皇吾洞 100番地2号、8. 慶州柏栗寺付近、9. 皇南洞 151号石室、10. 出土地不明、
11. 皇南大塚北墳、12. 塔里古墳2榔、13. 内面里、14. 出土地不明、15. 桂南里1号

表6 花瓣形系統の配列

製作段階	出土地	垂下飾		連結金具		中間飾		主環		垂下飾幅		副飾	曲面加工	細粒裝飾	共伴馬具	図	出典	備考	
		板状α1	板状β1	花葉a	花葉b	細環	太環	横	縦										
1	不明 出土地不明 A	心葉C	○		○			○								5-1	164	胸部に玉を使用。	
	不明 伝南韓出土 A	竹葉B	?	?	○			○									165		
	大邱 城山里 1号主櫓	竹葉B	○			○		○								5-3	166		
	不明 出土地不明 B	ペン先	○		○			○									167		
2	慶州 皇南洞 106-3 番地古墳	心葉C		○		○		○		○	2.1	1.8	○			慶州VI	5-5	168	胸部に玉を使用。
	慶州 皇吾洞 34号3桿	心葉C		○		○		○		○	1.9	1.8	○	○		5-2	169		
	不明 伝南韓出土 B	心葉C		○		○		○		?	?		○				170		
	不明 伝南韓出土 C	心葉C		○		○		○		?	?		○	○			171		
	不明 伝南韓出土 D	心葉C		○		○		○		○			○				172		
	不明 出土地不明 C	心葉C		○		○		○		○			○	○			173		
	不明 出土地不明 D	心葉C		○		○		○		○			○	○			174		
	慶州 青令里山 77番地出土	竹葉B		○		○		?	?				○	○	○	5-4	175		

表7 楠球形系統の配列

出土地	垂下飾			連結金具	中間飾		主環		垂下飾幅		副飾	曲面加工	細粒裝飾	共伴遺物		図	出典	備考
	錘A2	錘B1	錘B2		細環	太環	横	縦	馬具	土器								
慶州 天馬塚	○			なし	楕球	○	1.1	2.5			○	慶州VI	新羅II C中	5-6	176			
慶州 鶏林路 14号A	○			なし	楕球	○	1.7	2.5	○		○	慶州VI				177		
慶州 皇吾洞 100番地2号	○			なし	楕球	○	1.7	2.9	○		○			5-7	178			
不明 出土地不明 A	○			なし	楕球	○			○	○					179			
不明 出土地不明 B		○		なし	楕球	○			○	○				5-10	180			
慶州 壺杆塚		心葉C		なし	楕球	○			○	○	○	慶州VI				181		
不明 出土地不明 C		心葉C		なし	楕球	○			○	○	○				182			
不明 出土地不明 D		心葉C	板状β1	楕球	○				○	○	○				183			
慶州 皇南洞 151号 橫穴式石室		心葉C	なし	楕球	○				○	○	○	慶州VI		5-9	184			
慶州 鶏林路 14号B		竹葉B	なし	楕球	○	1.4	2.2	○	○	○	○	慶州VI				185		
慶州 味鄒王陵前地域 A-3号2桿		竹葉B	なし	楕球	○	2.0	2.8	○	○	○	?	慶州VI				186		
慶州 味鄒王陵前地域 C-1号		竹葉B	なし	楕球	○	2.0	3.0	○	○	○	○				187			
慶州 柏栗寺付近所在古墳出土		竹葉B	なし	楕球	○				○	○	○			5-8	188			
不明 出土地不明 E		竹葉B	なし	楕球	○				○	○	○				189	唯一、副飾の形態が竹葉形。		
不明 出土地不明 F		竹葉B	なし	楕球	○				○	○	○				190			
不明 伝南韓出土 A		竹葉B	なし	楕球	○				○	○	○				191			
不明 伝南韓出土 B		竹葉B	なし	楕球	○				○	○	○				192			
慶州 皇吾洞 16号1桿	ペン先	なし	楕球	○			○	○	○	○	○	慶州VI				193		
不明 伝南韓出土 C	瓢箪形?	なし	楕球	○			○	○	○	○	○				194	例外的な形態の垂下飾。		

具の通し孔上部には抉りが認められる。連結金具は板状α1類とβ1類をもつものにわかれる。

花瓣形系統の諸特徴は、竹葉形B類垂下飾を除き、円筒形系統に近い様相を示す。円筒形系統の変遷観を参考にすると、連結金具の形状から、製作段階をわけることができる。すなわち、板状α1類が用いられる段階と板状β1類が用いられる段階とに区分される。

5) 楠球形系統（表7・図5-6～10）

楠球形系統は、垂下飾と中間飾の連結を、通有の連結金具を用いず、中間飾と一体になったリングで上下の連結をおこなう点で、特殊な資料群といえる。主環は細環に限られる。セットとなる垂下飾には心葉形C類や竹葉形B類があり、円筒形や花瓣形に近い特徴が認められるが、一方で他の系統ではあまり認められない錘形b類を採用した例が一定数みられる。副飾の形状など、細かい意匠が系統内で共通するものが多く⁽¹⁴⁾、限定的な製作がなされた可能性が示唆される。

楠球形系統の配列は、連結金具が特殊で、楠球形中間飾の細分もおこなっていないため困難である。錘形垂下飾を採用した資料については、錘形A2類からのB1類への派生、B2類への変化、という流れで説明が可能であるが、心葉形C類や竹葉形B類垂下飾をもつ資料については、同一基準で

の配列が難しい。ただし、これらの垂下飾はいずれも、円筒形系統や花瓣形系統に照らすと時期的に新しいものとみなすことができ、橢球形系統全体が新しい時期の資料群であることが推測される。

橢球形系統の初現を考える上で重要な資料が、慶州天馬塚出土例(図5-6)である。この耳飾は、橢球形中間飾に錐形A2類の垂下部が接合されている。橢球形系統に錐形B類垂下飾が多い点などを勘案すると、橢球形系統自体が慶州天馬塚出土耳飾を祖形として創出されたものだという仮定が成り立つ。出土地不明資料が多いため、やはり共伴遺物からの時期の推定が容易ではないが、馬具は天馬塚出土の資料が最も古く位置づけられており、その点では上の仮定と整合する。ひとまず、橢球形系統が天馬塚例から派生して出現したものと想定しておく。

6) 立方体形系統群(表8・図3-17~22)

ここまで検討した空球形、花瓣形、橢球形の三つの系統は、その諸特徴が華籠形系統か円筒形系統のいずれかのみと共通しており、互いに排他的な在り方を示していた。しかし、立方体形中間飾をもつ耳飾群には、華籠形系統と共通する諸特徴をもつものと、円筒形系統と共通する諸特徴をもつものとが混在している。このことは、同じ立方体形中間飾を採用する耳飾の中に二つの異なる系統が存在していることを意味する。そのため、立方体形中間飾をもつ耳飾を配列するためには、まずそれがいずれの系統に属するものを峻別する必要がある。ここでは、心葉形B1類・B2類をもつものや、主環に太環を採用するもの⁽¹⁵⁾は華籠形系統群、心葉形C類をもつものや、垂下飾に副飾が付随するもの、垂下飾に曲面加工を施したものは円筒形系統群に属するとする基準を設ける。前者を立方体形①系統、後者を立方体形②系統とする。糸状連結金具の使用も、①系統の峻別基準としてある程度有効であると考えるが、垂下飾に曲面加工が認められる昌寧校洞89号墳出土例や、円筒形A類系統の慶州味鄒王陵地区出土例など、糸状連結金具は稀にであるが②系統でも確認されることがあるので、注意が必要である。

心葉形A類と糸状連結金具をセットでもつ資料は、華籠形系統第1段階に属し、板状 α 1類、心葉形B1類をもつ資料が第2段階に属するものと評価できる。心葉形B2類以降の垂下飾をもつ確実な例は今のところ確認されておらず⁽¹⁶⁾、①系統は華籠形系統第3段階に至るまでに製作されなくなったと考えられる。

②系統のうち、副飾の付与や曲面加工が認められる心葉形A類垂下飾をもつ資料は、円筒形系統第1段階に属する。心葉形C類は認められるものの、板状 β 1類金具が採用された例は慶州味鄒王陵第7地区7号墳例しか確認されておらず、②系統は円筒形系統第2段階までほぼ姿を消すとみられる。

ここで問題となるのは、①系統か②系統かの判別ができる資料の存在である。華籠形系統では、心葉形B1類が派生した後、A類の存続期間はさほど長くなかったものと考えられる。しかし、心葉形A類自体は、B1類派生以後も円筒形系統において採用され続け、副飾を付加したり曲面加工を施したりしながら、のちに心葉形C類へと変化する。したがって、心葉形A類にはある程度の存在時期幅が想定されるのであるが、円筒形系統などで用いられる心葉形A類は、必ずしも副飾とともに付随するか、のちに副飾を付加したりするわけではない。そのため、主環が細環で、心葉形A類垂下飾と板状 α 1類連結金具をもち、副飾や曲面加工が認められない資料は、①系統と②系統のいずれに属するものかを区別できず、配列が不可能である。これらの資料の時期的な位置づけは、円筒形系統第1段階か、華籠形系統第2段階に属するということになる。

7) 錐形A類垂下飾をもつ耳飾群(表9・図5-11~15)

表8 立方体形系統の配列

系統	出土地	垂下飾	連結金具	中間飾の小環			主環 細環 大環	垂下飾幅 横 縦	曲面 副飾 加工	粗粒 板状 装飾	共伴遺物	馬 器	土 器	図	出典	備考
				心葉 A 1	心葉 B 1	心葉 C 1										
慶州仁旺洞668-2番地10号積石木椁	○	○	板状 α	1	1	1	○	0.9	1.2	○	○	○	○	○	195	
慶州皇岳洞110号	○	○	板状 β	1	1	1	○	1.0	1.0	○	○	○	○	○	196	
慶山林堂7B号7号魏棺	○	○	板状 β	1	2	2	○	0.8	0.7	○	○	○	○	○	197	
慶州仁旺洞19号C椁	○	○	板状 β	1	2	2	○	1.1	1.1	○	○	○	○	○	198	
慶州皇甫大塚南墳A	○	○	板状 β	1	2	2	○	1.2	1.3	○	○	○	○	○	199	
慶州皇甫大塚南墳B	○	○	板状 β	1	2	2	○	1.3	1.4	○	○	○	○	○	200	
不出土地不明A	○	○	板状 β	1	1	1	○	1.2	1.2	○	○	○	○	○	201	
慶州土方里10号	○	○	板状 β	1	2	2	○	1.2	1.2	○	○	○	○	○	202	左右で連結金具が異なる。
慶州皇甫大塚南墳C	○	○	板状 β	1	1	1	○	0.8	0.8	○	○	○	○	○	203	
慶山林堂7C号主椁	○	○	板状 β	2	2	2	○	1.1	1.2	○	○	○	○	○	3-18	204
昌寧松鳳堂3号A	○	○	板状 β	2	1	1	○	1.8	1.7	○	○	○	○	○	205	
蔚山早日里3号	○	○	板状 β	2	2	2	○	1.7	1.6	○	○	○	○	○	206	
星州星山洞58号	○	○	板状 β	2	2	2	○	1.8	1.6	○	○	○	○	○	3-19	207
慶州皇甫大塚南墳D	円	○	板状 β	2	2	2	○	1.0	1.1	○	○	○	○	○	208	空球形系統とセットをなす。
江陵柄山洞40号	○	○	板状 β	2	1	1	○	1.2	1.2	○	○	○	○	○	209	
江陵草堂洞A2号	○	○	板状 β	2	2	2	○	1.8	1.8	○	○	○	○	○	211	
江陵草堂洞B16号	○	○	板状 β	3	2	2	○	1.5	1.4	○	○	○	○	○	212	
慶州瑞鳳塚A	○	○	板状 β	3	3	3	?	?	1.9	○	○	○	○	○	213	
慶州瑞鳳塚B	○	○	板状 β	3	3	3	?	2.0	1.7	○	○	○	○	○	214	
慶山林堂5B2号	○	○	板状 β	1	?	?	○	?	?	○	○	○	○	○	215	全体が金綱製。
昌寧校洞89号	○	○	板状 β	2	1	1	○	2.6	2.6	○	○	昌寧III	○	○	216	
不出土地不明B	○	○	板状 β	2	1	2	○	1.0	1.0	○	○	○	○	○	217	
慶州皇吾洞1号	○	○	板状 β	2	3	3	○	1.6	1.6	○	○	慶州IV	新羅II B	3-20	218	
星州星山洞1号	○	○	板状 β	3	3	3	○	1.6	1.6	○	○	○	○	○	219	十字形垂下飾と主環を共有。
龜天雲坪里M2号	○	○	板状 β	2	2	2	?	1.2	1.2	○	○	慶州V	新羅II C 古	221		
慶州金鈴塚A	○	○	板状 β	3	3	3	?	1.8	1.6	○	○	慶州V	新羅II C 古	222	垂下飾を2つもつ。中間飾の小環にガラス玉を象嵌。	
慶州金鈴塚B	○	○	板状 β	4	4	4	○	1.6	1.6	○	○	○	○	○	223	
不出土地不明C	○	○	板状 β	3	3	3	○	1.6	1.6	○	○	○	○	○	224	
慶州鶴林路47号	竹葉A	○	板状 β	3	3	3	○	2.0	1.5	○	○	○	○	○	225	
安東明倫洞出土	竹葉?	○	板状 β	2	2	2	○	2.0	1.5	○	○	○	○	○	226	心葉形B2類と同様の隆起部を有する特異な垂下飾。
江陵草堂洞A8号	○	○	板状 β	4	4	4	?	2.0	1.7	○	○	昌寧III	慶州VI	227		
昌寧校洞7号	○	○	板状 β	2	2	2	○	2.1	1.9	○	○	○	○	○	3-21	228
慶州味鄧王陵地区7-7号	○	○	板状 β	○	○	○	○	1	2	?	1.6	1.4	○	慶州V	132	円筒形b 1類系統と主環を共有。
慶州仁旺洞668-2番地1号魏棺	○	○	板状 β	○	○	○	○	2	2	?	1.5	1.6	○	○	229	
順興邑内里14号A	○	○	板状 β	○	○	○	○	3	3	?	1.5	1.6	○	○	230	
昌寧校洞1号	○	○	板状 β	○	○	○	○	2	2	○	○	1.6	1.6	○	231	
昌寧校洞3号B	○	○	板状 β	○	○	○	○	1	2	○	○	1.5	1.6	○	232	
慶山造永洞CI-1号主椁	○	○	板状 β	○	○	○	○	2	2	○	○	2.2	1.9	○	233	
慶州皇甫洞破壊古墳4号	○	○	板状 β	○	○	○	○	2	2	○	○	2.8	2.2	○	234	
金海大成洞87号	○	○	板状 β	○	○	○	○	2	2	?	1.4	1.4	○	慶州III前	235	
慶州皇甫大塚南墳E	○	○	板状 β	○	○	○	○	2	2	?	1.5	1.6	○	新羅II A 中	236	
順興邑内里14号B	円	○	板状 β	○	○	○	○	2	2	?	1.8	1.5	○	慶州III前	237	
義城大里3号	円	○	板状 β	○	○	○	○	2	2	○	○	1.8	1.5	○	3-22	238
大邱佳川洞39号石椁	円	○	板状 β	○	○	○	○	2	2	○	○	1.8	1.6	○	239	
不出土地不明D	円	○	板状 β	○	○	○	○	2	2	○	○	○	○	○	240	

上述したように、錘形A類は、垂下飾と中間飾が一体でつくられているという点で、構造や製作工程が他の垂飾付耳飾と大きく異なる。そのため、錘形A類をもつ資料は、ここまでにみてきたどの系統にも分類できない。

錘形A1類をもつ耳飾は、集安麻線溝1号墓などで類例が確認されており、これまで先学らによつて高句麗に系譜をもつ資料と指摘されてきた（東1988、三木1996、李漢祥2004など）。中間飾部には、空球形のものと華籠形のもの、立方体形のものがあるが、空球、華籠形は球体の下に接合される半球体をともなわないので、上で設定した中間飾とは形状が異なる。主環はほとんどが太環である。確実な新羅圏域での出土例は皇南大塚北墳例に限られること、麻線溝1号墓例と型式学的に連続するとみられる資料が高句麗地域において確認されることから、これらはやはり、いずれも高句麗から搬入されたものとみるべきであろう。

A2類は、先の想定ではA1類から変化ないし派生したものと推測したが、これと同一の例が高句麗地域で確認されていなかったため、A2類がどこで発生したのかは明確にしがたい。A2類は、義城塔里古墳第II墓槨出土例と、楕球形中間飾をもつ慶州天馬塚出土例に限られ、この2例についても、装飾技法面などで差異が大きく、単純に比較することはできない。同様に、錘形A3類をもつ資料も、これまでに5例が確認されているが、昌寧桂城里1号墳例を除いて出土時の情報が明らかな資料がない。錘形A3類をもつ耳飾の大部分が円筒形a1類中間飾と組み合わさることから、これらが塔里古墳第II墓槨例を祖形につくられた可能性がある。円筒形系統における円筒形a1類中間飾と比較するならば、錘形A2類、A3類をもつ資料は円筒形系統第1段階の早い段階、あるいはそれ以前の時期に製作されたと推測される。

3. 系統間の並行関係

すでに指摘したように、各種中間飾によって設定した系統は、特徴を共有する二つの系統群にわけることができる。すなわち、華籠形系統を代表とし、空球形系統、立方体形①系統を含む系統群と、円筒形系統を代表とし、花瓣形系統、楕球形系統、立方体形②系統を含む系統群である。これら二つの系統群は、それぞれの諸特徴が非常に排他的で、共通する変遷の指標を見出すことができない。そこで、耳飾の共伴関係と共に伴遺物の編年研究を参考にしつつ、これらの併行関係を探ってみたい。

まず、円筒形系統第1段階の資料のうち、皇南大塚北墳出土のb1類系統とc1類系統の耳飾に注目したい。皇南大塚北墳で出土した華籠形系統の耳飾は12対に上るが、華籠形系統第2段階に属する1点を除くと、残りはすべて第3段階に製作されたものである。第2段階に属する資料は、皇南大塚南墳で出土している資料と同様のもので、製作時期が早いものであろう。円筒形系統の耳飾は皇南大塚南墳からは出土しておらず、新出の型式であることから、円筒形系統第1段階の上限

表9 錘形A類垂下飾をもつ耳飾

出 土 地	垂下飾			中間飾	主環 細環	太環	共伴遺物		図	出典
	錘 A I	錘 A 2	錘 A 3				馬 具	土 器		
慶州 皇南大塚北墳 A	○			球体	○		慶州Ⅲ後		5-11	241
不明 出土地不明 A	○			球体	○					242
慶州 皇南大塚北墳 B	○			華籠	○		慶州Ⅲ後			243
慶州 皇南大塚北墳 C	○			華籠	○		慶州Ⅲ後			244
慶州 伝慶州出土	○			華籠	○					245
義城 塔里古墳II槨		○		円筒 a1 類	○				5-12	246
昌寧 桂城里1号主槨		○		華籠	○		昌寧 I		5-15	247
慶州 膽城路1号		○		円筒 a1 類	○					248
慶州 内面里出土		○		円筒 a1 類	○				5-13	249
不明 出土地不明 B		○		円筒 a1 類	○				5-14	250
大邱 新池洞北丘陵2号	?	?		円筒 a1 類	○					251
慶州 天馬塚	○			楕球	○	○	慶州 V 新羅ⅡC中	5-6	176	

は、華籠形系統第3段階の開始時期に近接することとなろう。ただし、円筒形a1類中間飾をもつ一部の資料については、華籠形系統第2段階に遡る可能性がある。

円筒形系統第1段階の下限を考える上では、慶州金鈴塚出土資料を参考にしたい。金鈴塚で出土する円筒形系統群に属する資料は、立方体形②系統の資料も含め、いずれも板状 α 1類金具と心葉形A類垂下飾の組み合わせに限られる。馬具や土器の研究において、金鈴塚とほぼ前後する時期と考えられる慶州飾履塚（諫早2012、白井2003）で出土した耳飾が、板状 β 1類金具を有する第2段階の耳飾であることを考慮すると、金鈴塚出土の最新型式の耳飾が製作されてまもなく、円筒形系統の

製作段階が第2段階へと移行したことがうかがわれる。一方、金鈴塚出土の華籠形系統耳飾には第3段階と第4段階のものが含まれ、過渡期に相当することがわかる。したがって、円筒形系統第2段階の開始は、華籠形系統4段階のはじめ頃と考えられ、これらの開始時期がほぼ並行するものとみても、年代の齟齬は誤差の範囲であろう。

円筒形系統第2段階の下限については、華籠形系統の耳飾と共に伴する資料自体が少ないため、比較がやや困難である。慶州瑞鳳塚と天馬塚で円筒形系統第2段階と華籠形系統第4段階の資料が共伴した例があるが、華籠形系統第5段階の資料との共伴例はなく、下限を確定できるような共伴例がない。ここで、共伴する馬具をみると、華籠形系統第5段階の資料は、いずれも諫早編年慶州VI段階を遡らないのに対し、円筒形系統第3段階では、慶州V段階の馬具が共伴する資料が散見される（諫早2012）。先に述べたように円筒形系統第2段階は、それ自体が過渡期に位置づけられるものであり、前後の段階に比べ短い時期幅が想定される。したがって、華籠形系統第4段階の後半には円筒形系統は第3段階へと移行していたものと考えられる。

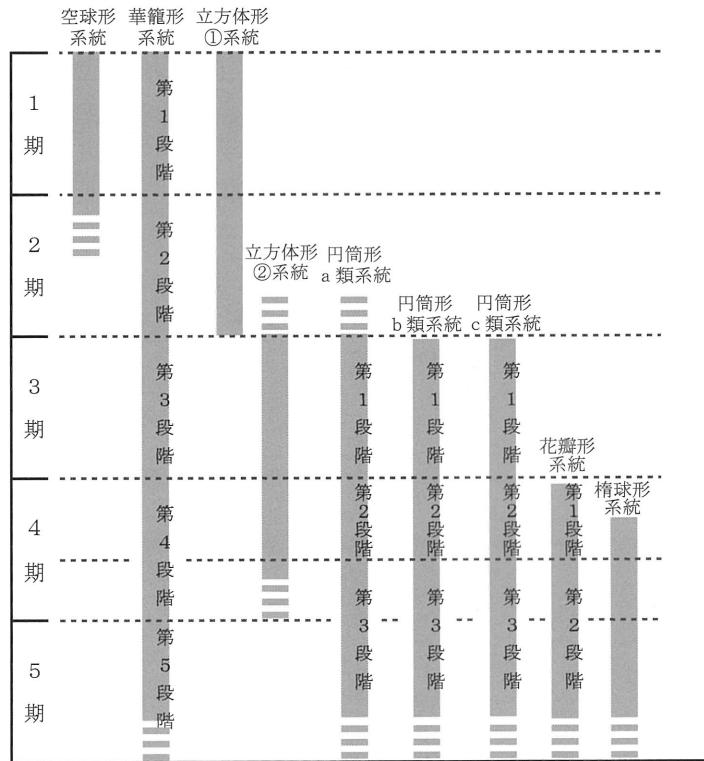


図6 系統の並行関係

V. 新羅における垂飾付耳飾の変遷

1. 変遷分期と実年代

前章で検討した併行関係を整理したのが図6である。また、個々の耳飾の年代的位置を把握するため、各属性の存在年代幅を図7にまとめた。以下、新羅の耳飾製作の変遷において系統を超えての属性変化が顕著な四つの画期を抽出し、1～5期にわけて検討していく。

分類ごとの評価に入る前に、耳飾の製作実年代について言及しておく。年代を考えるにあたって参考となるのが皇南大塚南墳および北墳の耳飾群である。華籠形系統の配列をみると、皇南大塚南墳の出土資料は1期から2期に属す一方、南墳に後続する皇南大塚北墳の耳飾群は、2期に属す

る華籠形系統の1点を除くと、残りはすべて3期に該当する。皇南大塚北墳で出土する新しい型式の耳飾群は、皇南大塚南墳被葬者が耳飾を新たに入手しなくなった後に製作され、北墳被葬者に献上されたものと考えられる。南墳被葬者が死没の瞬間まで耳飾の入手活動を続けていたと仮定しても、南墳被葬者と北墳被葬者の生存期間に重複があるだろうことを考慮すると、2期の耳飾を北墳被葬者がほとんど所有していない点から、3期の製作開始が皇南大塚南墳被葬者の没年を大きくは下るとは考えにくい。むしろやや遡る蓋然性が高いといえよう。

ここで重要なのは、皇南大塚南墳の被葬者を誰に比定するかである。現在、学界では奈勿王(402年没)とする見解、実聖王(417年没)とする見解、訥祇王(458年没)とする見解とにわかれ、議論が続いている。ここではその詳細に深く立ち入ることはしないが、耳飾からみた場合、どのように考えるのが最も整合的かという視点から被葬者について考えてみたい。

耳飾の年代を考える上で、もう一つの手がかりとなり得るのが金冠塚の資料である。金冠塚では、中間飾の形態から3期の後半に属すると考えられる円筒形a類系統耳飾と、3期と4期に属する華籠形系統耳飾が共伴しており、ちょうど3期から4期への過渡期に入手された耳飾群が副葬されている。金冠塚の実年代について、穴沢咲光は、金冠塚出土帶金具が公州宋山里4号墳で出土した帶金具と同一型式であるとして、宋山里4号墳の年代を熊津遷都以後とした上で、金冠塚の上限年代を5世紀末としている(穴沢1972)。宋山里4号墳は、吉井秀夫による横穴式石室編年の宋山里I段階に該当する。吉井は、宋山里II段階にあたる武寧王陵や宋山里6号墳の年代を6世紀前葉とした上で、I段階に5世紀後葉の年代を与えている(吉井1991)。この年代観を金冠塚の上限とするなら、4期の開始は早くても5世紀後葉を少し遡った頃となろう。

ここで、改めて皇南大塚南墳の被葬者について考えてみる。奈勿王や実聖王を南墳被葬者に比定する場合、3期の上限は4世紀末から5世紀初頭、あるいは5世紀の第一四半期前半以前ということになる。しかし、3期の下限が5世紀後葉前後ということになると、3期の存続期間は50年以上という計算になってしまう。ところが、3期に属する古墳を通観すると、共伴馬具はおおむね慶州III段階から慶州IV段階にまとまっており稀に慶州V段階が認められる程度、土器型式はいずれも新羅II Bに収まっている。こうした状況を勘案すると、南墳被葬者を訥祇王と考えて3期の開始を5世紀中葉頃と考える方が整合的である。より総合的な検討が必要ではあるが、ここでは皇南大塚

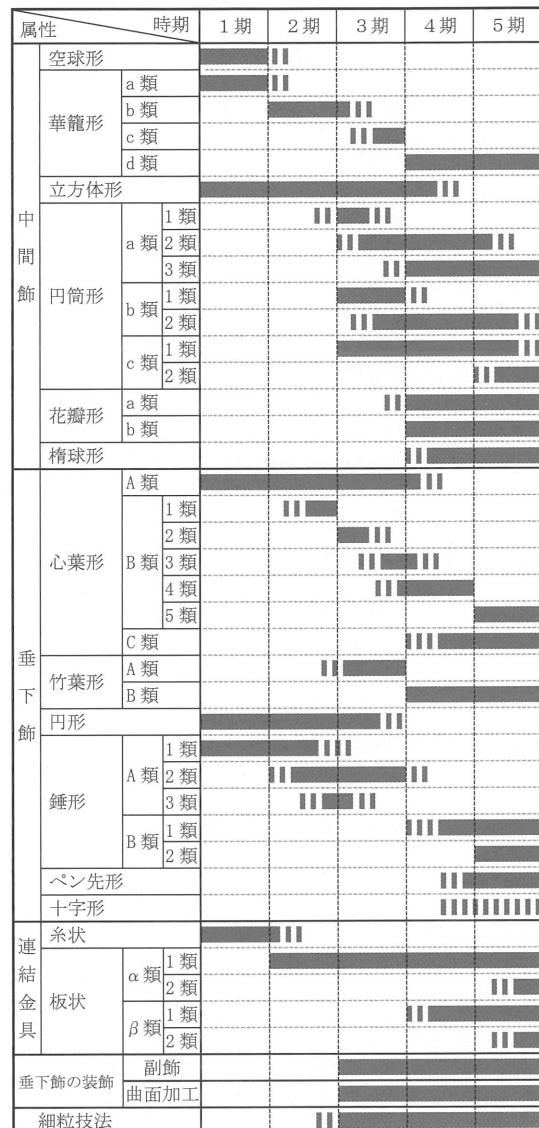


図7 各属性の存在年代幅

南墳の被葬者を訥祇王であるとする立場をとつておくこととする。3期の耳飾の製作年代を5世紀中葉から5世紀後葉頃までとし、続いて4期の耳飾製作が開始されると仮定しておきたい。

1期と2期の差異はさほど明確ではないものの、皇南大塚南墳から空球形系統第1段階の耳飾など、最古相の資料が出土していることから、1期を5世紀前葉以前、2期を5世紀前葉～中葉と考えておくとひとまず矛盾がない。同様に4期と5期の差についても、明確に年代的な差をうかがい知れる資料に恵まれないが、5期には梁山夫婦塚や金鳥塚の資料が含まれる。これらの遺跡の土器は白井編年の新羅II C古段階に属し、4期に含まれる天馬塚よりも古い段階のものとみなされている（白井2003）。こうした事実を勘案すれば、5期の開始は年代的にはさほど下らず、6世紀初頭ごろには華籠形系統5段階の資料の製作がはじまっていたものとみるべきであろう。

以上をまとめると、1期が5世紀前葉以前、2期が5世紀前葉～中葉、3期が5世紀中葉～後葉、4期が5世紀後葉～6世紀初頭、5期が6世紀初頭～前葉以降となる。

2. 垂飾付耳飾の変遷とその背景

以下、ここまでで設定した編年と分期をもとに変遷の画期を評価し、こうした耳飾製作における変化が他地域との関係の中でどのような意味をもつのかを考慮しつつ、その背景について検討する。

1) 垂飾付耳飾の成立

1期は、新羅における体系的な耳飾製作の開始期である。空球形系統と立方体形①系統、華籠形系統の資料が認められ、いずれも装飾性はさほど高くない。この段階の耳飾は、限定的な工房で、小規模に製作されていたと考えられる。

新羅での耳飾製作の開始には、これまでにも言及されているように、高句麗からの技術の伝播が

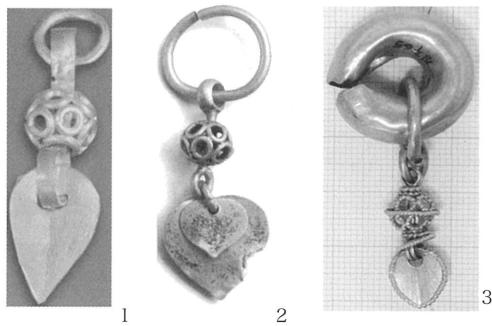


図8
高句麗出土耳飾と華籠形a類中間飾（縮尺不同）
1.台城里、2.出土地不明、3.皇吾洞14洞2櫛

その要因としてあったと考えられる。この段階に採用される華籠形a類中間飾は、球体部の小環が上半部と下半部で互い違いに接合されている。こうした特徴は、高句麗の耳飾において普遍的に確認される。これらは、上下対称に接合された大部分の華籠形中間飾とは異なり、小環同士の接合箇所が多く、製作工程においても華籠形2～4類中間飾とは差異をもつものと想定される（図8）。

こうした点を勘案すると、新羅の垂飾付耳飾は、製作技術上、高句麗の耳飾の影響を受けて成立したとみてよく、新羅での耳飾製作に高句麗の工人

が関わっている可能性が示唆される。ただし、華籠形中間飾や空球形中間飾のような球体と半球体を組み合わせた形状を呈する耳飾は、高句麗ではこれまでに確認されておらず、これは新羅で創出された可能性が高い。新羅では、慶州月城路カ13号墳例⁽¹⁷⁾のように、より早い段階から垂飾付耳飾が存在しており、服飾品製作の需要を受けて、独自の金工装飾品を開発しようとしたものと考えられる。この時期が5世紀初頭頃にあたる。

中原高句麗碑には、5世紀前半に新羅が高句麗の従属下にあったことが記されており、この時期の両国の関係の深化が指摘されているが、耳飾から考えると、それよりやや早く、高句麗南征の頃には、新羅と高句麗の関係は深化していた可能性が想定される。この時期は、金銀装環頭大刀

の出現（金字大 2011）など、新羅での金工品そのものの出現時期に重なっている。高句麗の南下政策がすなわち新羅における金工品製作体制整備の契機であるとは断言できないにしても、歴史的状況を考慮すると、この時期すでに新羅は高句麗の強い影響下にあったとみていいだろう（諫早 2012）。新羅内部での耳飾製作体制は、そうした高句麗との関係の中で整えられていったものと考える。

2期になると、空球形系統が姿を消す一方、華籠形系統の資料が急速に増えることから、新羅の耳飾製作が軌道に乗ったと考えられる。他方で、錘形A類垂下飾を採用した耳飾が認められる点に、1期に引き続く高句麗系技術工人の関与が看取される。とりわけ注目されるのが、義城塔里古墳第II墓槨出土の錘形A 2類垂下飾をもつ資料（図5-12）と、これから派生したと考えられる錘形A 3類の資料（図5-13～15）である。

先に指摘したとおり、錘形A 2類は、構造上、高句麗系とされる錘形A 1類に直結し、高句麗系工人による製作の可能性が高い。しかし、同様の資料は高句麗圏に類例がなく、現在の資料状況から考えると、高句麗からの移入品とするよりは、高句麗系の技術者が新羅において製作したと考えたい⁽¹⁸⁾。さらに、A 3類垂下飾は、各部の連結に別途連結金具を用いる新羅の一般的構造に近いことからも、高句麗系技術工人との関わりの中で新羅の工人が中心となってこれを製作したとみるのが妥当であろう。

こうしたことを考える上で、慶州仁旺洞 156-2号墳で出土した華籠形中間飾をもつ太環耳飾（韓国美術史学会 1973）が参考となる。この耳飾の中間飾は、球体部と半球部を接合した新羅通有の形状でありながら、球体部の中央に上半下半を区画する刻目帯をもたず、図8-1・2に示した資料のように、互い違いに配した小環が直接連接されている（図9）。こうした折衷的な資料の存在は、新羅での耳飾製作に高句麗系の技術者が関与していることを示唆するものと解釈できる。

3期には、華籠形系統が太環を用いた耳飾の意匠として定着し、垂下飾の形状など一系的な変化をみせはじめる。一方で、新たな型式として円筒形系統が普及することが特筆される。円筒形系統初現期の資料と考えられる慶州仁旺洞 19号墳K槨出土資料（図4-2）に、華籠形系統の特徴である歩搖が付されていることから、円筒形系統は基本的には新羅内部の工人らにより創出されたとみてよい。ここで注目すべきは、円筒形系統にみられる細粒装飾技法である。新羅の細粒装飾技法は、2期の耳飾が副葬された皇南大塚南墳で共伴する金製指輪と金製鉢で認められるが、これらは耳飾よりも早い時期に細粒装飾技法が用いられた資料であり、耳飾における細粒装飾技法の初現は、円筒形系統耳飾の中間飾装飾である。一方、この段階の華籠形系統耳飾には細粒装飾技法がまったく認められない点は重要である。華籠形系統は、これ以後さらに加飾化が進み、歩搖に玉を象嵌したもの⁽¹⁹⁾など、加飾化のための試行錯誤が続けられるが、細粒装飾技法は導入されない。華籠形系統と円筒形系統では、垂下飾の副飾の有無や曲面加工など意匠面で排他的な在り方を示すが、こうした差異は、製作工人集団の違いを反映しているものと評価したい。つまり、同一工人集団が華籠形系統とそれ以外で厳密なつくりわけをしていたとするよりは、この段階から工房内で、伝統的な太環耳飾としての華籠形系統耳飾を専門的につくる工人集団と、円筒形系統をはじめとする細環耳飾をつくる工人集団とが分化し、それぞれが別々で製作活動をしてい

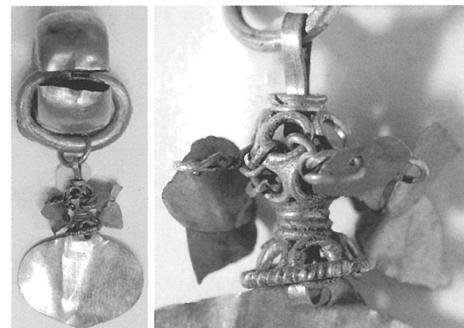


図9 慶州仁旺洞 156-2号墳出土垂飾付耳飾
左:S=70%、右:中間飾の細部

たとするほうが、より妥当ではないかと考える。細粒装飾技法は後者の集団が保有した技術であり、華籠形系統の製作工人集団はこの技術をもたなかつたのである。

3. 花瓣形系統にみる百濟との関係

4期に入ると、耳飾の装飾性がさらに高まり、それにともなう機能的な面での改良などがみられるようになる。こうした流れの中で、花瓣形系統と橢球形系統という新しい系統の耳飾が出現し、一方で立方体形中間飾がほぼ姿を消す。

橢球形系統については、上述したとおり、天馬塚出土の錐形A 2類垂下飾をもつ耳飾からの派生系統とみられるため、橢球形系統の発生を高句麗との関係から解釈することも不可能ではないが、細部の意匠や製作技法をみると、それまで新羅に存在していた技術から外れる新しい要素はほぼ認められない⁽²⁰⁾。橢球形系統は、新羅の工房内部で創出されたものと評価したい。

一方、花瓣形系統については、周知のように公州武寧王陵において類例が確認されることから、その出現は百濟との関係性を考える上で重要である。武寧王陵（王）耳飾（図10-1）は、花瓣形中間飾と心葉形C類の垂下飾を組み合わせた垂下部をもつが、同じ主環に一緒に垂下された金帽勾玉をともなう垂飾は百濟的な特徴（李漢祥 2000）を有するもので、百濟で製作された製品とみなくてはならない。武寧王の埋葬年代は525年であり、新羅で出土する花瓣形系統の資料より遅い時期となるため、単純に考えれば新羅からの影響ということになる。しかし看過できないのは、武寧王陵（王）耳飾の中間飾が花瓣形a類であるのに対し、新羅圏域でこれまでに出土した資料はいずれも花瓣形b類であるという事実である。a類とb類の差異は、成形方法の違いに直結するものであり、そもそも系譜を異にする可能性すらある。しかし、中央博物館所蔵耳飾（図5-1）と皇吾洞34号墳3槨出土耳飾（図5-2）の意匠の類似は、a類中間飾とb類中間飾になんらかの関係があることを示唆する。

百濟圏で出土した花瓣形中間飾を有する耳飾は、武寧王陵（王）出土例しか知られていないが、熊本県江田船山古墳において、花瓣形中間飾をもつ耳飾（図10-2）が確認されている。この耳飾は追葬時の副葬品とみられており、多くの百濟系遺物と共に伴している。江田船山古墳例の中間飾は花瓣形a類であり、このことからこうした耳飾が百濟で一定数製作されていた可能性が高いとい

える。重要なのは、百濟の影響を受けて新羅で花瓣形系統がつくられるようになったのか、新羅の花瓣形系統が百濟に影響を及ぼしたのかである。これを考える上で参考となるのが、3期以降に百濟圏域で新羅系耳飾の出土例が散見されるという事実である。

公州舟尾里3号墳からは、円筒形系統の耳飾（図11-1）が出土しているが、円筒形b 1類の中間飾や副飾をともなう心葉形A類の垂下飾は、新羅の典



図10 百濟の花瓣形中間飾をもつ耳飾
1 武寧王陵（王）、2. 江田船山

型的な耳飾と特徴を共有する⁽²¹⁾。扶餘東南里で出土したとされる円筒形a 3類中間飾をもつ耳飾（図11-2）は、副飾の形状や曲面加工がほどこされない竹葉形B類垂下飾など、やや特異な点が認められるが、やはり新羅的な意匠を有する。こうした資料の存在から、3期以降、新羅の耳飾がある程度百濟圏域で流通していたことがうかがわれる。このことを勘案すれば、新羅から百濟へ、主に意匠面で影響が及び、その結果武寧王陵（王）耳飾や江田船山古墳の耳飾が製作されたと考えができる。漢城期の耳飾ではみられなかった華籠形の意匠要素が熊津期以降の資料で確認されるようになる点⁽²²⁾も、新羅からの影響にともなう現象ととらえることができる。

先述したように、現時点までに新羅で花瓣形a類の資料は確認されていない。しかし本稿では、円筒形c類からの派生・変化の過程で新羅から百濟へと渡った花瓣形a類中間飾をもつ耳飾が存在しており、これに影響を受けてつくられたのが武寧王陵（王）耳飾や江田船山古墳耳飾であったと想定しておく。

ところで、慶州金冠塚で出土した円筒形a 3類中間飾をともなう3期の垂飾付耳飾は、特殊な意匠の垂飾と主環を共有している（図12）。この垂飾は、ガラス玉を象嵌した華籠形の球体に、十字

形垂下飾と丸みを帯びたM字形の垂下飾を兵庫鎖と金糸で連結したものである。この垂飾の意匠は、どの地域にも類例が知られない特異なものであるが、華籠形装飾を貫いて上下の兵庫鎖を連結する金糸および、一番下のM字形垂下飾を連結する金糸に注目したい。一条の金糸を用いて垂下飾を連結し、輪をつくって折り返した金糸の上端を巻き付けて処理するという特徴は、漢城期～熊津期百済の垂飾付耳飾でみられる連結金具と共に通している（李漢祥 2000）。このことは、金冠塚出土耳飾の製作に百済系工人が関与していた可能性を示唆する事実であり、興味深い。新羅的な要素が熊津期以降の百済の耳飾で認められるようになると勘案すると、当該時期における新羅と百済では、単なる製品の流通を超えた技術的な交流がなされていた可能性がある。いずれにせよ、3期後半以降、新羅と百済の関係が深まったことは、資料状況から明らかである。

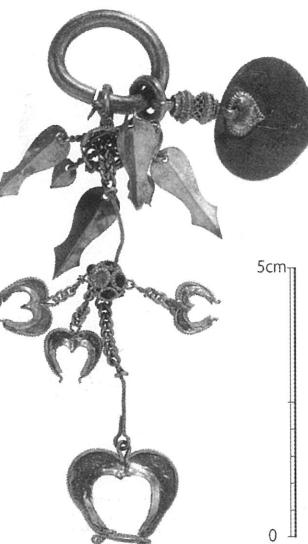


図12
慶州金冠塚出土垂飾付耳飾

4. 耳飾製作の縮小

5期に至って、耳飾の装飾性は最高潮に達する。華籠形系統の太環耳飾には、大量の歩搖が付され、主環や垂下飾にまで細粒装飾技法により文様が表現される。この段階において特記すべきことは、その意匠や製作技法が他の系統と非常に排他的であった華籠形系統に、他系統の要素がみられるようになることである。具体的には、細粒装飾技法の導入と、錐形B 2類垂下飾の採用である。



図11
百済圏域出土の新羅系垂飾付耳飾
1. 舟尾里3号、2. 東南里

上述したように、細粒装飾技法は、円筒形系統の製作工人集団が有していた技術である。また、一部の例外を除き、一貫して心葉形垂下飾が採用されてきた華籠形系統で、この段階に至って錐形B 2類垂下飾が出現するのも大きな変化とみなしうる。橢球形系統の発生とともに新たに創出された錐形B類垂下飾は、円筒形系統の製作工人集団が保有する装飾要素であった。

このことは、より高い装飾性を追求する新羅内部でなされた技术交流の結果とも解釈できるが、4期までの華籠形系統における保守的な意匠の在り方を勘案するならば、華籠形系統と円筒形系統のそれぞれの製作工人集団が統合された可能性を考えたい。新羅では智證王6年（505年）に州郡制が実施され、それまでの間接統治体制から地方官を派遣する直接支配体制へと移行する。このことで、新羅中枢が地方間接統治のための政治的アイテムとして活用してきた着装型威信財は、以前ほどの必要性を失ったとみられる。その結果、耳飾製作技術の高まりとは裏腹に金工品の製作工房は縮小され、耳飾製作工人集団は再び一つの工房へと統合されたのではないだろうか。円筒形C 2類の派生も、こうした脈絡から解釈することが可能かもしれない。

VI. おわりに

新羅の耳飾製作は、高句麗からの技術導入を基盤に5世紀初頭～前葉頃に開始された。新羅は、高句麗系技術を継続的に取り入れつつ、5世紀中葉ごろまでに耳飾製作を軌道に乗せ、独自の型式を創出して着装型威信財の主要な品目としての「新羅式垂飾付耳飾」を確立させる。こうして大量に製作されるようになった新羅の耳飾は、5世紀後葉ごろには一部が百濟にもたらされ、特に意匠面で大きな影響を与える。新羅の耳飾はその後より一層加飾化され、6世紀前葉ごろにその装飾性は頂点に達するが、一方で新羅の統治体制の変化にともない、耳飾生産は次第に縮小される。

こうした耳飾の様相からうかがえる対外的な交流様相は、文献史料や金石文の記述ともよく符合する。すなわち高句麗南征（400）を前後する時期から中原高句麗碑に記された5世紀前半にかけての高句麗・新羅関係が深化した時期に、高句麗的な技術を土台にして耳飾の製作体制が整えられていく過程、羅済同盟の締結（433）以降にみられる百濟との技術交流といった動向である。新羅における垂飾付耳飾製作の発展過程が、他地域との対外的関係と非常に密接にかかわっていることがわかる。とりわけ高句麗との関係については、5世紀前半における新羅社会の成長を促進させた直接的要因として、より積極的に評価する必要がありそうである。5世紀中葉ごろには新羅の高句麗勢力下からの脱却の動きが明確化するという指摘（井上2000）があるが、この時期における太環耳飾としての華籠形系統の型式的確立や円筒形系統の成立にみられる多様化は、高句麗との従属的関係の中で、新羅が内的な統治体制を整え、脱高句麗を可能とするだけの力を蓄えたことをうかがわせる。そして、その脱高句麗の動きが、5世紀後葉以降の百濟との関係の親密化へと直結している。

本稿では主に、新羅における耳飾の型式学的編年とその変遷の契機を明らかにすることに主眼をおいたため、対外的な視点からの画期の解釈が論の中心となった。しかし、今回試みた耳飾の系統・編年整理は、新羅の内的な社会状況をうかがい知る上でも十分に活用できると考える。このことについて、今後の課題としたい。

謝辞

本稿は、2013年12月に刊行された『韓国考古学報』第89輯掲載の韓国語論文を日本語に訳したものである。前々号に引き続き工芸文化研究所の鈴木勉氏のご厚意を賜り、本号に改めて日本語版を発表させていただくこととなった。記して謝意を表する次第である。なお、日本語版への改訂にともない、一部に加筆補訂をおこなったが、論旨に大きな変更はない。

本稿をなすにあたって、慶北大学校の李熙濬先生、朴天秀先生に多くのご指導をいただいた。奈良文化財研究所の川畠純氏、宮内庁書陵部の土屋隆史氏には、草稿に目を通していただき、方法論と解釈の部分について大変貴重な助言をいただいた。

また、下記の個人、機関から多大なご協力を賜った。末尾ながら、深く御礼申し上げる。

강정무, 경화순, 권순철, 김대우, 김대환, 김도영, 김동숙, 김민균, 김성태, 김양준, 김은경, 김하나, 김혁중, 남궁현, 랑조자, 류진아, 명세라, 村上由美子, 박영민, 송원영, 阪口英毅, 심재용, 東潮, 안성희, 山中理, 양시은, 王寧雅, 윤광민, 太田三喜, 오호석, 吉井秀夫, 海原靖子, 이승은, 이재환, 이현태, 李須惠, 이정은, 임영재, 정지은, 조가영, 조규복, 최기은, 橋詰文之, 江陵原州大学校博物館、慶北大学校考古人類学科、慶熙大学校中央博物館、啓明大学校行素博物館、高麗美術館、京都大学考古学研究室、京都大学総合博物館、檀国大学校石窟寺紀念博物館、東国大学校慶州キャンパス博物館、国立慶州文化財研究所、国立慶州博物館、国立公州博物館、国立金海博物館、国立大邱博物館、国立扶餘博物館、国立中央博物館、大成洞古墳博物館、天理大学附属天理参考館、釜山大学校博物館、ソウル大学校博物館、大和文華館、嶺南大学校博物館、蔚山大学校博物館、和泉市立久保惣記念美術館、白鶴美術館（敬称略、コレニ順）。

註

- (1) ただし、出土地不明の資料には、美術品として流通する過程で、商品的価値を高めるため、本来失われているパートを別個体と組み合わせることで完形品のように見せかけたものもあり、注意が必要である。
- (2) 太環は、部材の組み合わせ方による細分の可能性が指摘されている（周景美 1997、権香阿 2004b）が、その峻別には実物観察による確認作業が必須であり、これを悉皆的に実施することは実質上不可能であるため、本稿では細分を控える。
- (3) 細環についても、材質による細分は可能であるが、やはり悉皆的な実物観察が困難であるため、細分はおこなわない。
- (4) 新羅圏域では、慶州瑞鳳塚出土例（パクジニル・シムスヨン編 2014；図版 19-8）と江陵柄山洞 29 号墳出土例（国立慶州博物館 2001；p.240 の 305）の 2 例が知られている。
- (5) 時期が下ると立方体の上下の小環の数が、二つから三つへと増えるという指摘もある（李漢祥 2004）が、これに当てはまらない資料も多く、小環の数を時期的指標とするのは難しい。
- (6) 小環連接の段数が 3 段以上の資料は極めて稀である。大邱飛山洞 34 号墳第 1 墓櫛出土例が 3 段、大邱飛山洞 37 号墳第 2 石櫛出土例（図 4-6）が 4 段で構成される。
- (7) 細粒装飾はほぼ認められない。唯一、慶州路西里 138 号墳出土の円筒形 c 1 類中間飾にのみ、数個の金粒の溶着が認められる。
- (8) 心葉形 B 類の細分については、李漢祥による分類基準（李漢祥 1998）をほぼ踏襲している。
- (9) 中間飾から「垂下」されるものでないという点で、厳密には「垂下飾」とはいえないが、分類の便宜上、垂下飾の一種とした。
- (10) 日本の学界では『連繫金具』の表現がより一般的であるが、韓国では主に『連結金具』が用いられている。本稿では後者を採用する。
- (11) 李漢祥は周縁部に刻目帯を巡らせた B 4 類の出現に、慶州皇吾洞 14 号墓第 1 横で出土した、周縁部にのみ刻目帯を付した垂下飾（図 3-3）からの影響があると指摘している（李漢祥 1998・2004）。しかし、華籠形中間飾を採用した耳飾の中で、このような垂下飾をもつ資料は皇吾洞 14 号墓第 1 横例が唯一であり、またこれら資料の間には大きな時期差があることから、積極的な影響関係を認めるのは困難である。
- (12) 国立慶州博物館所蔵の菊隱李養璿蒐集文化財に、心葉形 B 1 類と糸状金具を有しつつ、華籠形 d 類の中間飾が組み合う例が存在する（国立慶州博物館 1987 : p.217 図面 65-④）。同例は出土地不明品であるが、本稿で想定した型式学的な変遷の流れの中では明らかに例外的な組み合わせを示す例であるため、完形品にするため部品で出土した別個体を組み合わせた「寄せ物」である可能性が疑われたが、肉眼観察では明らかな捏造の痕跡は認められなかった。しかし、同コレクションに含まれる別資料の中には、耳環部と垂下部とを異常に細い遊環でつながる太環耳飾や、打出部分が極めて弱く、光沢も不自然な心葉形 B 1 類垂下飾をもつものなど、やや疑わしい資料が複数確認されたため、同コレクションの資料は今回の検討対象からは除外してある。
- (13) ただし、垂下飾の法量は華籠形系統の円形垂下飾よりやや大きく、これらは同じ円形でも性格を異にするものと考えられる。
- (14) 副飾の形状が、一例を除いて、いずれも円形である点などが挙げられる。
- (15) ただし、慶州皇吾洞 1 号墳例は冠飾にともなうものであるため、例外に該当する。
- (16) 慶山林堂 5 B 2 号墳出土例は、報告書の図面では心葉形 B 3 類垂下飾をもつようであるが、実際には裏面に突帯が確認されず、銹化により状態が良くないためはっきりとはしないものの、表面も打出によって隆起させたものとみられた。したがって本稿では B 2 類と判断したが、B 3 類である可能性はないと断言することはできず、また、素材が金銅と特殊であるため、そもそも例外的な形態を呈する資料であった可能性もある。

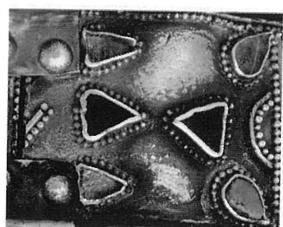
- (17) 新羅の垂飾付耳飾で、最も年代が遡る資料と考えられるのが、慶州月城路カ13号墳出土資料である。この耳飾は、非常に特異な意匠を有し、他地域にも類例がみられない（三木 1996）ため、位置づけが難しい。しかし、この資料の装飾は、垂飾付耳飾でなく、冠に付随する垂飾において類品を見出すことができる。すなわち、いわゆる垂飾を耳に垂下する装飾品へと転用したものと考えられ、垂飾付耳飾という装飾品が普遍的に存在していない段階のものであったとみられる。
- (18) ただし、錐形A2類垂下飾とともに天馬塚出土耳飾（図5-6）は、共伴する耳飾などから考えると時期がやや下り、單発的に外部から持ち込まれた可能性は否定できない。
- (19) 慶州瑞鳳塚出土資料（パクジニル・シムスヨン編 2014；図版 19-7）などがある。
- (20) 棱球形中間飾の表面に付された金板を菱形に曲げて溶着させた装飾は、円筒形系統の中間飾において認められる装飾意匠である。連結金具を用いない構造については他系統に類例がみられないが、中間飾と垂下飾を一体でつくる錐形A類垂下飾の構造をとらない点を重視すると、新羅系の技術工人により意匠だけが再現されたものと解釈できる。これまでみられなかった錐形B類垂下飾の出現などもこのことを傍証する。
- (21) 舟尾里3号墳例は、胴部を上下から挟む部品が、通常の半球形でなく平らな金板になっており、やや差異が認められるため、必ずしも新羅で製作されたものが搬入されたとは断言できない。
- (22) 梨華女子大学校所蔵の伝扶餘陵山里古墳出土耳飾（国立中央博物館 1999）などで、小環連接球体の上半部をガラス玉に被せる意匠が認められる。

参考文献

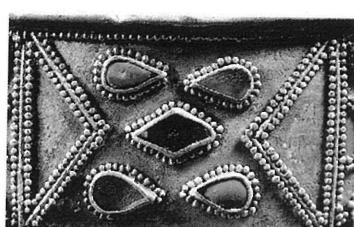
（ハングル）

- 国立慶州博物館 2001『新羅黄金』シティーパートナー
- 国立慶州博物館 編 2011『慶州普門洞合葬墳』国立慶州博物館学術調査報告 第24冊 国立博物館文化財団
- 国立慶州博物館・慶州市 編 1990『慶州市月城路古墳群一下水道工事にともなう收拾発掘調査報告一』国立慶州博物館・慶州市
- 国立公州博物館 2011『武寧王陵を格物する』国立公州博物館
- 国立中央博物館 1999『百濟』通天文化社
- 国立昌原文化財研究所 2000『蔚山早日里古墳群発掘調査報告書』学術調査報告 第9輯 国立昌原文化財研究所
- クォンジュヨン・イソヌリム 編 2006『昌寧 松峴洞 古墳群—2～5号墳試掘調査および6・7号墳発掘調査一』昌寧郡・慶南文化財研究院
- 權香阿 2002「三国時代耳飾の鍍金技法に関する研究」『韓国工芸論叢』Vol. 5 No. 1 韓国造形デザイン学会 pp. 7-35
- 權香阿 2004a「三国時代細鍍耳飾の製作技法研究」『文化伝統論集』特別号 2輯 慶星大学校附設韓国学研究所 pp.1-29
- 權香阿 2004b「三国時代太鍍耳飾の製作技法研究」『韓国工芸論叢』Vol. 7 No. 2 韩国造形デザイン学会 pp.173-196
- 金邱軍ほか 2004『大邱不老洞古墳群発掘調査報告書—91・93号墳一』学術調査報告 第44冊 慶尚北道文化財研究院
- キムボサンほか 2012『慶州チョクセム地区新羅古墳II-C地区発掘調査報告書一』学術研究叢書 76 国立慶州文化財研究所・慶州市
- キムヨンオク・ユソンヘ 編 2004『朝鮮中央歴史博物館』朝鮮文化保存社
- 金龍殷・李賢泰 編 2009『博物館代表遺物特別展』慶熙大学校開校60周年記念 慶熙大学校中央博物館
- 金元龍 1955「一三八号墳調査報告」『慶州路西里 双床塚・馬塚・一三八号墳調査報告』国立博物館古蹟調査報告 第2冊 乙酉文化社 pp.27-63
- 金元龍 1969「皇吾里第一号墳」『慶州皇吾里第一・三三号・皇南里第一五一号古墳発掘調査報告』文化財管理局古蹟調査報告 第2冊 文化公報部 pp.3-34
- 金載烈 2007『慶山地域古墳の装身具研究』嶺南大学校硕士学位論文
- 金載元 1948『壺杆塚と銀鈴塚』国立博物館古蹟調査報告 第1冊 乙酉文化社
- 金載元・尹武炳 1962『義城塔里古墳』国立博物館古蹟調査報告 第3冊 乙酉文化社
- 金廷鶴ほか 1980「味鄒王陵地区第7区域古墳発掘調査報告」『慶州地区古墳発掘調査報告書』第2輯 文化財管理局・慶州史蹟管理事務所 pp.9-130
- 金廷鶴・鄭澄元 1975「味鄒王陵地区第5区域古墳発掘調査報告」『慶州地区古墳発掘調査報告書』第1輯 文化財管理局・慶州史蹟管理事務所 pp.153-262
- 金鍾徹ほか 2006『星州星山洞古墳群』啓明大学校行素博物館遺蹟調査報告 第13輯 啓明大学校行素博物館
- 金宅圭・李殷昌 1975『皇南洞古墳発掘調査概報』古蹟調査報告 第1冊 嶺南大学校博物館
- キムヒョクチョン・チョギヨンファ 編 2014『比斯伐の支配者 その記憶を探る』国立金海博物館・昌寧郡・ウリ文化財研究院
- 柳眞娥 2011「慶州皇吾洞34号出土装飾具類の報告」『慶北大学校博物館年報』第8号 慶北大学校博物館 pp.71-99
- 文化財管理局 1975『天馬塚発掘調査報告書』社団法人韓国文化財普及協会
- 文化財管理局 文化財研究所 1985『皇南大塚I(北墳)発掘調査報告書』文化財管理局

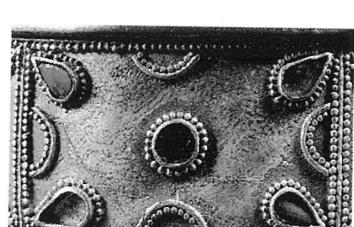
文化財管理局 文化財研究所 1994a『皇南大塚II（南墳）発掘調査報告書』文化財管理局 文化財研究所
文化財管理局 文化財研究所 1994b『順興邑内里古墳群発掘調査報告書』文化財管理局 文化財研究所
パクガソミン・キムジンギヨン 2010『蔚山下三亭古墳群II—蔚山圈広域上水道（大谷ダム）事業編入敷地内4次発掘調査一』
学術調査報告書 第227冊 韓国文化財保護財団・韓国水資源公社
朴普鉉 1995『威勢品からみた古新羅社会の構造』慶北大学校博士学位論文
朴日薰 1964「皇南里破壊古墳発掘調査報告」『皇吾里四・五号古墳 皇南里破壊古墳 発掘調査報告』国立博物館古蹟調査報告
第5冊 国立博物館 pp.29-54
朴日薰 1969「皇南里第一五一号墳」『慶州皇吾里第一・第三三号皇南里第一五一号古墳発掘調査報告』文化財管理局古墳調査報告
第二冊 文化公報部 pp.115-145
パクジョンファほか 2006『義城大里里3号墳』慶北大学校博物館学術叢書33 慶北大学校博物館
パクジニル・シムスヨン 編 2014『慶州瑞鳳塚I（遺物篇）』日帝強占期資料調査報告13輯 国立中央博物館
パクヒョンジュ 編 2002『大邱佳川洞古墳群I』嶺南文化財研究院学術調査報告 第44冊 財団法人嶺南文化財研究院
三星美術文化財団 1984『湖巖美術館名品図録』三星美術文化財団
辛勇旻 2000『昌寧桂城古墳羣（上）』湖巖美術館遺蹟発掘調査報告 第6冊 三星文化財団 湖巖美術館
辛勇旻ほか 2006「金海伽耶の森造成敷地内文化遺蹟遺蹟発掘調査報告書」『金海伽耶の森造成敷地内 金海茂溪里共同住宅建設敷地内 遺蹟発掘調査報告書』（財）東亜細亞文化財研究院発掘調査報告書 第8輯 財団法人東亜細亞文化財研究院
沈奉謹 1991『梁山金鳥塚・夫婦塚』東亜大学校博物館
沈奉謹ほか 1992『昌寧校洞古墳群』古蹟調査報告 第21冊 東亜大学校博物館
沈載龍 編 2013『東アジア交易の架橋！大成洞古墳群』大成洞古墳博物館10周年記念特別展示会 博物館学術叢書 第12冊
大成洞古墳博物館
嚴永植・黃龍潭 1974『慶州仁旺洞（19・20号）古墳発掘調査報告』慶熙大学校博物館叢書 第1冊 慶熙大学校博物館
嶺南大学校博物館 編 1999『慶山林堂地域古墳群IV—造永C I・II号墳—』嶺南大学校博物館・韓国土地公社
尹世英 1974「古新羅・伽倻古墳の編年に関する一古墳出土冠帽を中心に—」『白山学報』第17号 白山学会 pp.41-112
尹世英 1975「味鄒王陵地区第9区域（A号破壊古墳）発掘調査報告」『慶州地区古墳発掘調査報告書』第1輯 文化財管理局・慶州史蹟管理事務所 pp.67-151
尹世英 1984「新羅耳飾の型式学の一考察—耳飾の構造および型式分類を中心に—」『文理大論集』第2輯 高麗大学校文理大学 pp.173-186
李東熙ほか 2010『順天雲坪里遺蹟II』順天大学校博物館学術資料叢書 第66冊 順天市・順天大学校博物館
イミニョン・チエギュジョン 編 2010『慶州士方里古墳群—慶州士方里 996-1番地遺蹟—』（財）新羅文化遺産研究院調査研究叢書 第30冊 財団法人新羅文化遺産研究院
李盛周ほか 2011『江陵草堂洞古墳群』江陵原州大学校博物館
李恩碩ほか 編 2011『昌寧松峴洞古墳群I—6・7号墳発掘調査報告—』国立加耶文化財研究所・昌寧郡
李殷昌 1978「慶州仁旺洞古墳発掘調査」『韓国考古学年報』5 ソウル大学校博物館 pp.21-49
李殷昌 1980「味鄒王陵地区第4地域古墳群（皇南洞味鄒王陵前地域A地区古墳発掘調査報告）」『慶州地区古墳発掘調査報告書』第2輯 文化財管理局・慶州史蹟管理事務所 pp.131-340
李殷昌ほか 1991a『昌寧桂城里古墳群—慶南1・4号墳—』学術調査報告 第9冊 嶺南大学校博物館
李殷昌ほか 1991b『慶山北四里古墳群』学術調査報告 第10冊 嶺南大学校博物館
李仁淑 1977「古新羅期装身具についての一考察」『歴史学報』第62輯 歴史学会 pp.35-73
イチャンヒョンほか 2007『江陵柄山洞古墳群II—江陵柄山洞329番地自動車整備施設敷地内遺跡—』江原文化財研究所学術叢書 70冊 江原文化財研究所
李漢祥 1995「5～6世紀新羅の辺境支配方式—装身具の分析を中心に—」『韓国史論』33 ソウル大学校人文大学国史学科 pp.1-78
李漢祥 1998「5～6世紀新羅太環耳飾の分類と編年」『古代研究』6 古代研究会 pp.33-60
李漢祥 1999「三国時代耳飾と帶金具の分類と編年」『三国時代装身具と社会相』第3回釜山広域市立博物館福泉分館学術発表大会 釜山広域市立博物館福泉分館 pp.25-67
李漢祥 2000「百濟耳飾についての基礎的研究—編年・製作技法・分布—」『湖西考古学』第3輯 湖西考古学会 pp.23-45
李漢祥 2002「6世紀代新羅太環耳飾の製作技法と編年」『慶州文化研究』第5輯 慶州大学校文化財研究所 pp.1-30
李漢祥 2004『黄金の国 新羅』金英社
李漢祥 2008「韓国古代耳飾の鑑定のための着眼点—製作地と年代を中心に—」『服飾』第58卷5号 韓国服飾学会 pp.35-50
李漢祥 2010「義城地域金工威勢品の製作技法と年代」『韓国古代史の中の召文国』慶尚北道義城郡・慶北大学校嶺南文化研究院 pp.91-122
李炫姫 2014「馬具からみた昌寧地域の馬事文化」『比斯伐の支配者 その記憶を探る』国立金海博物館・昌寧郡・ウリ文化財



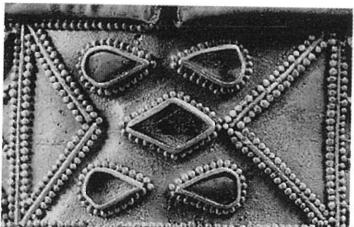
A



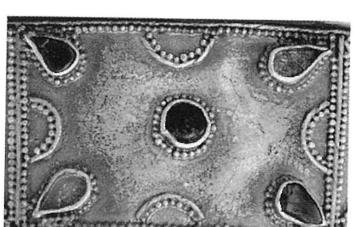
B



C



D



E



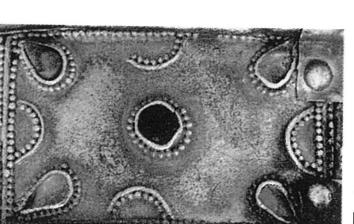
F



G



H



I

原色図版 皇南大塚北墳出土嵌玉腕輪とその細部文様

文化財と技術 第7号

2015年12月1日 印刷

2015年12月1日 発行

編集 鈴木 勉
発行 特定非営利活動法人 工芸文化研究所
所長 鈴木 勉
発行所 特定非営利活動法人 工芸文化研究所
所長 鈴木 勉
東京都台東区根岸5-9-19 (〒110-0003)
印刷 千葉刑務所
千葉県千葉市若葉区貝塚町192 (〒264-8585)